
ネットオク男の楽しい異世界貿易紀行

medici

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトオク男の楽しい異世界貿易紀行

【Nコード】

N3102Y

【作者名】

medici

【あらすじ】

最終学歴高卒で親元パラサイトの青年綾馳次郎はネットオークションで生活する物欲溢れるネオニート（収入があるニート）。出品するお宝探して蔵から見つけた古い鏡は異世界と行き来できる魔法の鏡だった！！ 異世界のお宝を買うために相互貿易でお金を貯めて、物欲満たして幸せ一杯の異世界ライフ！ になる予定。物欲だけじゃなく、チートとか奴隷とかもありマス。男の欲望とか多めなので苦手な方はスルーしてネ。

第1話 うぶだしミラーは異世界の香り（前書き）

初作品、初投稿です。お見苦しい点ばかりですが、よろしく願います。

第1話 うぶだしミラーは異世界の香り

「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国であった」

有名な小説の冒頭の文が頭のなかで反芻している。

俺、綾馳次郎^{アヤセジロウ}の場合はもっと劇的に「蔵の古い鏡を抜けると、そこは真っ暗な部屋であった」 となるだろうか。

……よし。意味わからねえ……。

その真っ暗な部屋にも鏡があって、もともといた蔵と繋がっているようだった。鏡面が妖しく蔵の中を映している。

焦って鏡の中に飛び込んでみれば、問題なく行き来できることを確認して安堵の息が洩れた。

蔵に来るときに持ってきた懐中電灯で部屋を照らす。石作りのカビ臭い部屋の内部が浮かび上がるが、鏡以外にあるのは木製の箱だけだ。

それ以外にはなんにもない。

だいたい8畳間くらいの部屋だろうか。窓もなんにもないので、外の様子は全くわからない。何の音も聞こえてこないから、地下室

かなにかかもしれないな。あとは出入り口の木製の頑丈そうな扉がひとつ。ここから外に出られるんだろう。

とりあえず、唯一置かれている木製の箱を開けてみることにした。昔熱中したRPGの宝箱みたいな箱だ。

……おおっと！ どくばり！ は勘弁してくれよ——、と、思いながら開けると、当然ワナなどではなく問題なく開いた。

中身は服一式だった。

中世風というかなんというか、シェイクスピア劇で使う扮装のよきな服だ。絹製でフリフリの付いた長袖シャツ、金糸の刺繍が施されたいかにもな時代めいたベスト、太めのズボンとベルト、他にはなにも入っていないかった。

まさに装備一式。本当に宝箱だったのな……。

服はいったん箱に戻し、これからどうするか考える。扉から外に出てもいいが……。

そして、少し悩んだがひとまずは鏡の世界から脱出して、蔵に戻ることにした。

蔵に戻り、さきほどの部屋と同じようにカビ臭を感じながら、気持ち落ち着かせて考えてみる。ありえないことが起きているというのはわかる。古い蔵で見つけた鏡が別世界へ通じてました！ なんて、ファンタジーではお約束な設定だけれども、実際に起こると存外に困るもんだな。さて、どうすっかなあ。

……まあ、ひとつ言えることは、この鏡はすごい高値で売れる！ ということやで……。



俺は高校を卒業してからの就職で失敗して、それから2年近くニートを続けている。就職で失敗したと言っても、就職ができなかったわけではない。最悪最低のブラック企業に入ってしまった、精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまい退職した、というだけの話だ。

退職してからは、どうしても仕事をする気になれずブラブラゴロゴロしてたんだが、いつまでもなにもせずにいられるわけもないわけで、偶然本屋で見かけた「儲かる副業！ネットオークションで月収30万円！」という本を買い、その本の通りに、古本やら古道具やらをネットオークションで売りさばいてみたら、ことのほか儲かってしまったて……。それから、まあ、それで生活している。

幸い、近所で毎週フリーマーケットが開催されているし、地元の大い神社での骨董市なんかでもそれなりに良い物が買えるため、オークションで思った以上の収益を上げることができていた。

途中からは自分も面白くなってしまって、半分くらい趣味と実益を兼ねていると言っても過言ではないけどな。

最初のころはなにが高いのかよくわからなくて、赤字とまではいかなかったが「儲かる」というほどではなかった。しかし今ではずいぶん慣れてきて、微妙に貯金すらできているほどだ。

もともと物好きアイテム好きではあったが、これはなかなか才能があるなど、自分でうぬばれちゃうね。

鏡を見つけたのは、以前からアプローチをかけていた近所の旧家の蔵の中だった。桐の箆^{タンス}の裏に隠されてるようにして置かれていて、枠はマホガニーかウォルナット。重厚な意匠が凝らされ、年式も古そうだったし「これは存外良さそうなものを見つけたぞ、問題はなんて言いくるめて買い叩くかなー」などと皮算用していたのだが……。

考え事をしながら暗い蔵の中をウロウロしていたからか、足元に雑に積まれていた古道具類に足を取られて、鏡のほうに倒れこんでしまい、そのまま鏡の中に吸い込まれた。そして、冒頭にもどる。

……というわけだ。ザツと言うと、そんな感じ。

蔵の中にはまだ金になりそうなものがあつたが（古い皿や火鉢なかの道具類とか、その道具をしまう行李も売れるし、昔のオモチャなんかも売れる。だいたい古いってだけである程度高く売れちゃうので、蔵はまさに宝の山なのよ）、今はまずは鏡だ。蔵から出て、家主さんに、蔵の中にあつた鏡だけ買い取りたいと交渉を始めることにした。

「あ、すんませーん。蔵のなか見させてもらった者ですけどおー」

居間で茶を飲んでいる家主（80歳くらいのおばあちゃん。経験から言って老婆はチョロイ）に声をかける。

「蔵の中にあつたもので、とりあえず大きい姿見だけ今回譲って欲しいんですよ。ちょっとサイズ大きいもんで、他のもの運べないもんでね、鏡だけ。で、金額なんですけど、4000円で買い取らしていただきたいんですよ。よろしいですか？」

一気に喋る。もう4000円は出しておく。取引は有無を言わずスピーディに行うのが肝心だ。「心変わりしだす前に撤収しなければ……」　と思っている。

「あー、あんなかにあるもんはもう全部いらんもんじゃけ、なんでも持ってってええよ。金もいらん」

と老婆。やったー！　超ラッキー！　だが、実はこれはよくあるパターン。蔵を開かせるところまでいけば、もうほとんど中身はもらえたも同然だったりするのだ。

蔵の持ち主ってのは大抵は蔵のことを「古いガラクタが詰まっている片付けの面倒な倉庫」程度にしか認識していない。自前の倉庫を知らないやつに漁らせるのは嫌だけど、かといって中身を大事にしているわけでもない、というわけだ。俺みたいな貧乏人からすると宝の山なんだけどねー。金持ちってのはそういう性分だから金持ちなのかもしれない。

——そんなわけで、無事鏡をゲットして、割らないよう車に積み込んで家まで運んだ。

俺は、一人暮らしをしていない。

両親と同居してる。もっと言うとパラサイトと言ってもいいかもしれない。

就職してないから……、と言い訳して、ちょっとばかりの食費を払っているだけである。兄弟は兄貴と姉貴がいて、どっちももう家を出てる。

俺は末っ子で甘やかされて育ったから、パラサイトでも仕方がないんだ！　でも就職したら家から出ます！　就職したら必ず出ますぞ！

第2話

異世界屋敷はヨーロッパの香り（前書き）

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り

行くべきか行かぬべきか、それが問題だ。

鏡を前にして俺は唸っていた。この鏡が別のどこかへ通じているとしても、別に無理して行かなくてもいいのだ。必ず帰ってこられる保証もないし、うっかりどっちかの鏡が割れたらおそらくはそれでジ・エンド。どちらにも行き来できなくなろうだろうしな。

向こうに行けないのはともかく、帰ってこれなくなるとかマジ勘弁。

……かといって、なにもせずにこの鏡を売ると言ってもな……。最低でもどこへ繋がっているのか程度は調べないと、売りようがない。「超レア！どこかへ繋がっている魔法の鏡！特価1億円」では誰も買わないだろう。というか本気にされない。どうみてもネタ出品もののね。

なのでとにかく、鏡の世界を探索することにした。

鏡が繋がっているのは謎の石の部屋。その木製の扉を開いた先がどうなっているか全くの未知数なので、考えられる範囲で準備しなければならぬが、とりあえずはすぐ戻れる範囲だけ調べてみようと思う。

玄関から編み上げブーツを持ってきて履き、懐中電灯で照らしな

がら鏡の世界へ入る。ヌルツとした触感もなく、世界を移動する。本当に奇妙だが、今はとにかく探検だ。この鏡自体のことはおそろくどれほど調べてもわかるまい。

木の扉に門が掛かっていたので外し、少しだけ扉を開いて向こう側を伺う。

石の部屋は地下室だったのだろうか、扉の向こうは同じような石作りの昇り階段で、階段が途切れた先から淡く光が洩れている。正直すでに心臓バクバクなんだが、とにかく進むしかない。正直、かなりビビってます。

おっかなびっくり階段を上った先は、西洋風の屋敷の廃屋の一室だった。窓から指す日の光が、淡く部屋内を照らしている。

広さとしては3LDKといったところだろうか。現代的な西洋屋敷という風情よりは、もう少し雑な石作りの屋敷で、残されたオーク材の重厚なテーブルや、マホガニー製の食器棚が、かつての住人の生活を偲んでいる。

イギリスかフランスあたりへと繋がっていたのだろうか……？と考えながらも、残されている道具を物色する。食器棚やテーブルなどの家具は残されているが、小物類はこれといってなにも見つからなかった。前住人は大物だけ残して引っ越したのだろうか、上手くすればオクで売れるものが見つかると思ったんだが……。

まあ、食器棚やテーブルもかなり良い物なので、売れば相当良い金になるだろう。勝手に持って帰って売っていいのかどうかは知らないが。

どうやら外国と繋がっていることが判明したので、外に出てみる

ことにする。恥ずかしながら、少しだけファンタジー的な異世界と繋がっているんじゃないかという懸念があったのだ。

鏡の世界ってだけで十分にファンタジーだな。

家の外も完全に荒れ果て、雑草というレベルでは片付けられないレベルの有様である。つか、木だよこれ。林の中に家があるって感じに近い。日本家屋だったらとっくに倒壊してるだろう。

そうでなくても家はもとも林の中にポツカリと開いた場所にあったみたいで、回りは全部、背の高い広葉樹の林。それでもなんとか、もともと道だったらしきところを発見し、しばらく歩いて行くと草原に出た。人影は全くない。田舎っていうか、手付かずの土地って感じ。

されどもめげずにしばらく歩いてみると、小さい村を発見した。

鏡のある屋敷と比べると質素な石作りの家が十数件ある。俺は林の中から身を隠して発見した第一村人の農夫を観察してみることにした。

農夫は西洋系のおっさんといったところ。やはり外国……、つまり地球のどこかではあるらしいが、ここで俺が出て行っても身分証明もなけりゃ、言葉も通じないわけで実際どうしようもない。なので、さて、どうするか……。

そのまま隠れて観察を続けていると、畑の反対側から農夫の嫁といった風情の女が来て叫んだ。

「あんたー、お昼持って来ただよー！」

それに気付いて作業を中断し、返事をしながら女のほうへ向かう男。

……うむ。完全に日本語だったな。

厳密には、日本語として「理解した」という感じだ。耳に入ってきたときはまったく別の聞きおぼえのない言語だったはずだ。だがなんていうか、脳内で一瞬で日本語として変換された。

これなんて翻訳こんにゃく？



ひとまず、いったん屋敷へ帰ることにした。

今回の自動翻訳でまた一気にファンタジー度が増した。うっかり「やあ、日本から観光に来た者です、H A H A H A！」なんて声を掛けたりいきなりオマワリさんと呼ばれて拘束！ となる可能性も排除できないからな。現代の地球の西洋の国なら、そんなことはないだろうけども、最悪の可能性も考えておかないといかん。

屋敷に帰った俺は、なにかこの世界に関する情報がないか今一度

家捜ししてみることにした。まだ見てない部屋もあるとはいえ、リビング？ にテーブルと花台くらいしかないところを見るとあまり期待はできそうもないが……。

最初に書籍を探したが、やはり一冊も見つけられなかった。文字を見れば一目瞭然だっただがな。

他の部屋にも家具がいくつか残されていた、タンスやベッド、チェアにデスク、チェストにブックビューロー。どれも良い品だ。まとめて売れば100万円は下らないだろう。もう、これら売っちゃって、それでこの鏡のことはおしまいにしてもいいのかも……、と思ってしまう程度には美味い^{うまい}です。

しかし、肝心の決定打になる情報が見つからない。

この家にあるのは、地下室の箱の中にあつた例のシェイクスピア服と、英国アンティークみたいな趣の家具類だけである。まあ、これらだけでも現代世界とは思えないわけだが、アンティーク趣味の人が住んでた家と言われてしまえばそこまでであるからして。

あとは裏口と屋根裏ぐらいしか見るところが残っていない。正直、屋根裏はただでさえホコリっぽいのに勘弁してほしいので、裏口を開けてなにかないか探してみる。

と、そこに蜘蛛がいた。

厳密には裏口の壁のところに蜘蛛が巣を張ってたのだが、この蜘蛛、胴体だけで10センチほどもある。そして脚が12本あり、脚も入れた全長は25cmくらいだろうか。巣の真ん中で大人しく佇んでいるだけだが、……これはでかい。

蜘蛛が苦手な人が見たら気絶してもおかしくないレベルだわ。

携帯のカメラでおっかなびっくり写真に収めて、鏡の部屋から自分の部屋へ戻る。

携帯の蜘蛛の画像を元に巨大な蜘蛛についてネット検索する。ちようど同じサイズのものでルブロンオオツクモというのが出るが、これではない。そもそもツチグモじゃないしな。ジョロウグモの類のようだし。そもそも脚が12本ある時点で蜘蛛ですらないし。

落ち着くために台所でコーヒーを入れて持ってきて、一息入れた。インターネットでの情報が絶対だと言うつもりはないが、これでひとつの可能性が消えたと見て間違いないだろう。

とりあえず「現代の地球のどこか」ではない。過去の地球か、異世界の二択になったわけだ。

今、ググッても見つけられないクモは、単純に絶滅しただけかもしれないからな。とはいえ、自動翻訳の件もあるし、異世界の可能性のほうが高いと言わざるを得ないだろうな。これからは、異世界にいるものとして行動したほうが良さそうだ。

つまり、モンスターが出るかもしれない。とか、魔法で撃たれるかもしれない。とか、異端審問に掛けられて火あぶりなるかもしれない。とかだ。

気楽な気持ちでうろついていたらヤバイと思っとかないと……。

第2話 異世界屋敷はヨーロッパの香り（後書き）

オーク材とかマホガニー材とかは、主人公がそう思っているだけで、
厳密にはきつと違う木です。よく似てるだけで。

第3話 異世界衣装はコスプレの香り

親ゆずりの臆病者で子供のころから損ばかりしている。

そんなわけで、もう少しだけ向こうの世界の情報を得たら鏡は売却することにした。単純に異世界とか怖いし、過去の世界だとしたら、それはそれで怖い。ハッキリ言って俺の手に余る。

厳密には売却する前に「異世界へ渡航できる権利」を100万円くらいでネットで若者を募って売ろうかと考えている。行けなかったらお金は頂かないという風にすればいいしな。

300人も向こうに送れば3億円ですよ。ウツハウハ。

その後で、ノウハウを売るという触れ込みで鏡ごと売却してしまえば、異世界とも後腐れなくサヨナラできるし、お金もたくさんゲットできて一石二鳥だわ。7億円とかで売れば、合計で10億円！遊んで暮らせる！！

……とはいえ、現段階では完全に絵に描いたモチ。もっと情報を得て、それなりに上手くやらなきゃな！。

で、まあ、結局はもう少し鏡の世界の情報が必要なのだ。なのでいったん鏡の世界へ入り、例のシェイクスピア服を持つてくることにした。あ、向こうのものってこっちに持ち込めるのかな、そういうええ。

……普通にこっちの世界に持ち込めました。

ひょっとすると持ち込めない可能性も考えてたけど、まあこれで、屋敷の家具はこっちでオクに掛けられる。ちよつとした軍資金にはなりそうだ。

屋敷の服は何年も宝箱の肥やしだったとは思えないほど、しっかりとしており、サイズも多少小さい程度で問題なく着れた。

しかし……、これは恥ずかしい。ヒラヒラとした飾りの付いたシルクのシャツってだけで、なんとも言えない気分だが、さらに刺繍入りのベスト。これもちよつと光沢のある生地だし、パンツもかすかに光沢がある。なんで全体的に光沢多めなんだろう。

だいぶコスプレっぽくて恥ずかしいが、あの世界に溶け込むには必要な処置だと自分を納得させる（農夫もこんな格好だったような気がするしな）。まあ、自前の服だと、ジャージとかトレーナーとか、そんなもんしかないし、それよりは自然だろうと思うことにした。

バッグに必要な道具、というか、もしもの時の自衛の為の武器（自作のナイフを数本）を入れ、編み上げブーツを履いて鏡の中へ入る。

屋敷の外にでて、ふと気付く。そういえば時間のことなんにも考えてなかった。

日本時間は10時をちよつと回ったところだが、こっちも同じ時間とは限らないのだった。全く知らないところで日が暮れるたりしたら、それこそ死の危険がある。

日の高さを確かめようとして、眼に入っただけに愕然とする。
ああー……………「この世界の情報」　こんなところがありましたよ。なんで気が付かなかったんだろ。

昼間なのに月が二つでてきました。



太陽はちょうど頭上の位置。昼の長さがどうなのかはわからないが、とりあえずすぐに日が暮れる心配はなさそうだ。ここが異世界なのはもう確実と言っている。

地球に月が二つあった歴史はないはずだからな。

屋敷の前の林を抜け草原に出る。前に来たときと違い、全くの異世界だと思えば、林の木々もなんだか見たことのない種類のものが多く混じっているように見えてくる（実際全部異世界種？なわけだけど）。

———　そういえばガラパゴス島では、観光客が他の地域の種を持ち込まないように、靴底を洗ってから上陸させたり、遊歩道以外は歩かせないなどの管理を徹底しているらしい。

全然気にしてなかったけど、異世界を歩き来するなら、そのへんもある程度は気を配らないと思わぬ事態にならないとも限らないな。こっちの虫を一匹持ち込んだばかりに、向こうの虫が何種類も絶滅したりとか絶対には言い切れないし。

そんなことをツラツラ考えながら歩いていると。

ガサツ　ガサツ

50mくらい向こうの茂みから音がして、すわモンスターかと身構えたところ。

不精ヒゲのワイルド系猟師が出てきた。

殺したばかりと思いきイノシシ的な生き物を引きずって。

第3話 異世界衣装はコスプレの香り（後書き）

超短くてすみません。

第4話 異世界はRPGの香り

「どっどど どどどど どどどど どどど」

まずい、まったく心の準備ができていなかった。「どうもこんにちは」 と言おうとしたのに死ぬほど どもった 吃った。

「どうした？ こんなところでなにしてる？」

「どどどどうもこんにちは」

やっと普通にこんにちはできた。

獵師は見た目30歳後半といった感じの、ブラウンの髪と無精ヒゲがワイルドなナイスミドル。

弓を肩に掛け、腰には大振りなマチェット。マタギよろしく毛皮の服を着て、こちらを見つめる両目は目力強^{めちから}すぎてちょっと怖い。質問に挨拶で返してしまったが、仕方がない、なんとかファーストコンタクトを成功させねば……！ と、とにかく言葉を紡いだ。

「えー、あつと、それがですね、なんというか、自分もどうして自分がここにいいのかわからなくてですね。なんというか……、気付いたらあっちの森の中にいたっていうか……、自分の過去が思い出せないっていうか……、ハッキリ言う^と記憶喪失^てっていうか！」

記憶喪失設定でいくことにしてみた。

まあ、これは最初から決めてたことだが、他に思いつかなかった

からな。しかし、猟師のポカンとした表情を見ると、どうも失敗したかな？　という気もしてくるけど仕方がない。押し通すしかないぜ。

「記憶喪失か……。見たとこかなり若いみたいだが……。おい、名前くらいは覚えているのか？」

「……名前と歳は覚えています。ジロー・アヤセ。21歳です」

そう答えると、アゴに手をやってなにやら思案していたようだが、彼の中でなにかを把握したらしく、ウムと頷いて言った。

「そうか。なぜ記憶を失ったのかはわからんが、……おそらく内陸からの脱出組だろう。ベストの刺繍もドレスシャツもこの辺りには無い物だ。……憲兵から逃げてきたにしては、身奇麗過ぎるが……」

「……えっと、憲兵に追われる要素があるんですか？」

聞き捨てならない単語を聞いて焦る。え？　ガチで憲兵とか存在してたんですか……？　のん気に村で「こにゃにゃちわ」してたら、ガチでタイーホの可能性もあったってこと？

「ああ、内陸からの脱出者は憲兵に捕らえられ本国送還になるか、依頼して労働奴隷になるかのどちらかになる。まあ、だいたいの脱出者はこっちに協力者を持っていて上手く溶け込んでいるようだがな。……お前みたいに脱出者丸出しの格好してるやつは稀だよ。ちなみに、脱出者を憲兵に引き渡すと報奨金として銀貨3枚が貰える」

そう言ってニヤリと笑う猟師。ちなみにじゃないよ、ち

なみにじゃ。

良かれと思って着た異世界服で、マジで奴隷になる5秒前とか洒落になんねー！！　こんなことなら大人しく自前の服着てればよかったんや……。このガチムチ猟師が俺を憲兵に引き渡したら、異世界で楽しい奴隷生活がはじまってしまうんや……。

俺はよほど絶望的な顔をしていたらしい。猟師はそんな俺をみて嬉しそうにワッハッハと豪快に笑い、手を振りながら言った。

「悪い悪い。冗談だ。いや、銀貨3枚の話は本当だが、別にお前を憲兵に渡したりはせんよ。ここでの出会いもル・バラカのお導きだろう」

「……ありがとうございます。……いやあ、心臓に悪いですよ……」

「さて、俺はコイツをさっさと解体せにやらんから家へ帰る。どうする？　来るなら運ぶのを手伝え」

と言って、イノシシを引きずって村とは反対方向へ歩き出す猟師。どうするもこうするも、今のところは猟師を頼る他になさそうなので、イノシシを運ぶのを手伝うしかなかった。



獵師の家は、村からは大体1kmほど離れてた小高い丘の上にあった。村にあった石の家とだいたい同じような家で、周りには小さい畑があり質素ながらも、なんていうか、幸せの気配がする、そんな家だ。

俺はイノシシと一緒に運びながら、「このガチムチ獵師がアツチの趣味の方だったら、どう考えてもオッサオッサ」などと考えていたが、素朴な生活の気配のする家が見え、そこに獵師の奥さんと思しき女性がいるのを見て、ひとまず安心した。ノンケだコレ。

奥さんと思しき女性は、2人暮らしのようだし、やはり奥さんだったようだ。獵師よりだいぶ年下と思われる肉感的な赤毛美人で、獵師ほどではないけど、背が高く、なんとも肉弾戦な夫婦である。

獵師がイノシシを解体している間、奥さんがこの世界のことをいろいろと教えてくれた。

まず、「内陸からの脱出組」とやらが、見つかるとアレな理由なんだけど。

今いるここは、ハノーク帝国領の第2自由都市エリシェの街の近郊にあたる場所らしい。自由都市は帝国の都市でも特別なもので、エリシェのほかに2箇所だけ定められ、その都市でだけ他国との貿易が許されているんだそうだ。それ故、他の帝国都市と比べて活気があり、また物資も豊富なため、制限を掛けないといくらでも他の

帝国都市から人が押し寄せてきてしまう。それで、例の本国帰還か奴隸化かって話になるわけで、実際マジで俺もヤバいところだったわけだ。猟師さまさまだ。

猟師は名前をシェロー・ロートといい、この辺りで猟をしながら、モンスターが森から出てくるのを監視したり退治したりする仕事をしているそう。

猟師になる前は傭兵として、それなりにブイブイ言わせてたそうで、奥さんことレベツカさんも同じ傭兵団出身となればまさに異世界クオリティ。奥さん身長180cmくらいあるんだよ……。猟師にいたっては190近いし……。

モンスターは基本的にはこの辺りにはいないんだそう。ただそれでも自然発生的に”湧いてしまう”ことがあるらしく、その場合、人のいる場所へ真っ直ぐ向かってくるため、村と森との直線状にあるこの場所で監視するのが最も適している。……という説明だったんだけど、なんともわかりづらい。湧いてしまうって？

「モンスターってのは、血肉を持った生物じゃあないからねー。森みたいに魔素が溜まりやすい場所では、ときどき湧くんだよ。それで、一直線に強い魔力を持つ人間を襲いにやってくる。それを私たちがやってるってわけさ。ま、このへんでは大した奴は湧かないし、心配はいらないよ」

「あ、いえ、心配、というわけではないんですけどね。しかし、それではモンスターは通常はどんな場所に『湧く』んですか？」

「普通はダンジョンに湧くわね。あとは竜が住んでいるような場所も魔素が濃くてモンスターが湧きやすいかな。ま、ダンジョンは出入り口に結界を施してるから、中からモンスターが出てくることは

ないし、竜がいるような場所も人里から離れた場所だからね。一般人がモンスターを目にする機会は少なくなるわ」

ダンジョンk t k r。

なんとも正統派なRPGワールドである。モンスターの定義は予想の斜め上だったけど、それほど出ないみたいだし、そこらで襲われることはなさそうだ。

——と、思っていたら、魔獣やら亜人族やらの『野生動物』が、人里から離れたところにはいるので十分危険だそうで……。特に亜人族は人間を痛めつけて連れ帰ってアレしちゃうようなナニなんかいやー貞操の危機の多い異世界で参っちゃいますね！



イノシシ解体中のシェローさんが戻ってきて、手伝いのためにレベッカさんを連れて行った（皮を剥ぐ為に一旦イノシシを吊る必要があるそうだ）為、部屋を検分して生活様式をこっそりチェックすることにした。文明は進んでないみたいだけど、こういう道具使っ

てるのか凄く興味あるしな。

基本的には、木製の道具が多いが、壁に飾られている飾り皿は磁器のようだし、カトラリーも銀製のようだ。まあ、普段使いの皿は磁器ではなく陶器と木の器のようだし、磁器は高級品ということだろう。そのわりにカトラリーはすべて銀（だと思う）だ。ステンレス鋼がないんだろうな、おそらく。

キッチンのかまど式で当然ガスなんかはなし。燃料は木炭で、今は火を落としている。

壁にシェローさんの武器と思しき使い込まれた大剣が立てかけられていた。

さすがに勝手に触るのはルール違反のような気がしたので触らなかったが、その横の壁に、装飾の施された短剣ダガーが飾られているのを見つけて、目が釘付けになってしまった。

鞘に入っているので刀身は見えないが、絶妙な捻れもくの入った黒檀ニの鞘に幾何学文様の螺鈿細工らでんが入り、鞘の石突と口金、鐔つば、柄頭つかがしらは青白く輝く金属製で美しい彫金エボが施されている。柄はらせん状に削られた鞘と同材料の黒檀で、こちらも柸もくの入りが美しい。

一見しただけでわかる、素晴らしい品だ。黒を主体とした落ち着いた一品であるのに、魔力とでも言うようなオーラが立ち昇り、その存在を主張している。

これはどうあっても刀身も見たい。

シェローさんとレベッカさんはまだイノシシと格闘中のようなだったので、ちょっとだけちよっとだけよ……と呟きながらコッソリ短剣を手にとって、鞘を引き抜いた。

鈍く輝く刀身はダマスカス製らしい多層鋼の文様入りの両刃で、鎬の部分にはルーン文字のようなもの（とにかく読めない文字のよな記号）が打ち込んである。

……うん。文句なしにカッコいい。

——ヤバイ、ハッキリ言ってめっちゃ欲しい。

こんな物欲が刺激されるアイテムは久しぶりだわあ。これくらいのブツだとオクに出さずに殿堂入りにするんだけどな！。

つか、こんなのが普通にあるってことは、上手くやればこういうのこっちで手に入れられるってことなんじゃね？ これは短剣^{ロングソード}だけど長剣でもこれくらい素晴らしいやつもあるんじゃない？

ヤバイ、異世界深入りするつもりじゃなかったけど、こんなお宝が手に入るならもうちょっと無理してもいいかもしれないか思いはじめちゃった！ 思いはじめちゃった！

ハッキリ言って日本だったら重要文化財クラスなんじゃね？ う

おー！ どうしよどうしよ！

うおオン！

「……それが気に入ったの？」

「っっ！」

突然声を掛けられて飛び上がる。つい熱中しすぎてしまい、レベツカさんが戻ってきたのにぜんぜん気がつかなかった。

「……えっと、はい、すみません、勝手に触ってしまっ……。こ

んなにカッコいい剣は見たことがなかったの」

「ふふふ、記憶喪失なのに、そういのはわかるの？」

「……（あちゃー）」

やっべ、失敗した！　と思っていると、あまり気にした様子もなくレベツカさんが続ける。

「それね、傭兵やってたところに団長が皇帝から賜った品でね。団長が亡くなったときに形見として貰ってきたもののよ。実際に使うようなものじゃないから飾ってるんだけどね。なかなかステキでしょう？」

「はい、……記憶が戻ったとかではないんですが、この剣にはなんだか引き寄せられてしまっ……。こういうものを扱うような仕事でもしていたのかもしれない」

「仕事？　——そういえばジローくん天職は？」

「……テンシヨク？　ですか？」

「祝福は受けているんでしょう？　その天職よ」

……かれこれ2年くらいニートなんですけお……。それに祝福ってなんだろうか。そもそもなんで職業聞いてくるの？　誤魔化しきれないニート臭が……？

「……すみません、ちょっと天職？　のことは記憶を喪失している

ようで……。あと祝福つてのもよくわからなくて……」

「天職は、祝福を受けているなら、念じれば見られるわよー。こう『天職、天職、天職……』とね」

なんというフワツとした説明……。さっぱり意味がわからねえ。そもそも、祝福なんてものは受けてないんだから、見られるわけがないんだし、念じたフリして「無理でした。祝福とやらは受けていない模様です」 と誤魔化した。

「うーん？ ジローくんは商人見習いだったりしたのかしらねー。狙った天職を得るための修行するのはたまーにあることだし……。ま、とにかく明日、祝福を受けに行ってみましようか、試しに。これからエリシエで暮らすなら結局なんらかの天職が必要になるしねー」

「祝福つてのがイマイチよくわからないんですけど、こういうものなんですか？」

「”祝福を受けて天職を得る”。大精霊ル・バラカが祝福を授けてくださるのよ。そして、天職に目覚めるというわけ」

祝福を受けて天職を得る……。か。わかるようなわからないような話だ。しかし明日ってことは、今日どうすんの俺。家になんにも言ってきてないんですけど……。

「とにかく今日は泊まってきなさいな」

「は、はい！ ありがとうございます。お世話になります！」

某RPGの「てめえみてえなガキは一晩泊まっていきやがれ」
を思い出しながらやけくそで返事をする俺だった。

第5話 異世界都市は地中海の香り

どこか深いところからゆっくりと浮かび上がるように、俺は意識を取り戻しかけていた。

……まあ、普通に朝になって目が覚めたってただけでもな。慣れない人んちのベッドだけれど、思いのほか良く眠れてしまった。なんだかんだいって疲れてたんだなあ。昨日はあのあと、夕飯をこ馳走になってから、すぐ寝たんだけど。

しかし昨日の夕飯はなかなかにワイルドだったなあ……。

シェローさんが「今日はご馳走だぞ、ラッキーだったな」と持って来たのはイノシシの肝臓^{レバ}で、主食は芋、副菜は豆、さらにシェローさんが手ずから焼いたイノシシステーキ。

当然レバーは生のまま、味付けは岩塩だけで頂きました。まあ、ワイルドだけと思いの他美味しかったよ。新鮮で。

しかし、イノシシステーキはちよつと野趣強すぎて都会育ちのおいらにゃ辛いものがあつただよ……。味は濃いけど、臭いもわりと濃い……。食べられないほどではないんだが、せめて香辛料かなんかで誤魔化せれば……。と思ったけど、香辛料は高級品なんだとかで。

じゃあ香草とかでもよかったんだけど、人んちでご馳走になっていて文句も言えないしなー。けっこう要領いい末っ子の俺としては「とっても美味しいです!」とか言って食べましたよ。かなり胃がもたれたがな!

とは言え、初の異世界での食事。味覚に大きな差があったらどうしようかと、少し心配もあったが、多少ワイルドさがあるとはいえ、基本的なところに差はなさそうで安心したものだ。

今度は味噌でも差し入れしてやろう。異世界人の口に合うかはわからないが。

——さて、考えてたのとちよつと違う展開に巻き込まれるようにして、一晚異世界で過ごしてしまったわけけれども、これからどうしようか……。昨日、寝る前に多少は考えたが——

まず、一つ目として。

当初の予定としては、こっちの情報がある程度得たら「異世界へ渡航できる権利」を売ろうと思ってたけれど、この国の情勢だと、正直かなり無理くさいことが判明してしまったこと。

なんせ、内陸から来たと思われたら憲兵にタイーホだ。さすがにそんな異世界ライフを売りつけるわけにもいかんだろう。

二つ目として。

例の短剣^{ダガー}のこと。

あれだけの品は、普通に俺が日本でネットオークション遊びをしていても絶対に手に入れることはできないと断言できる。まあ、こちらの世界でも簡単に手に入るようなものでもないだろうが(皇帝

から賜ったと言っていたしな）、だが傭兵へ褒美として渡すくらいだ、完全に入手できないほどの品でもないだろう。

滅多に見られないようなお宝だとはいえ、ちよつと驚くくらい夢中になっていて、我ながら引くわあ……（昨日もあのあと小一時間くらい見させてもらってしまった）。

三つ目として。

日本に異世界の品を持ち込んでネットオークションに掛けても儲かりそうだが、日本からこっちに物を持ち込んだら、もつとずっと儲かりそうだっていうこと。昨日の夕飯での香辛料の例を出すまでもなく、売れそうなものは数限りなくあるし。

それと昨日それとなくシェローさんに聞いたんだけど、こっちの通貨って、銅貨、銀貨、そして金貨なんだよね。金貨ですよ金貨。日本に持ち帰ればそのまま換金できる！グラム4000円ぐらいだっけ、今。

正直、フリーマーケットでお宝探するのが馬鹿らしいほどの効率を叩き出すのが明白だもんだから、かなり商売っ気が出てきてしまっているんだよね。

四つ目として。

まあ、これは三つ目からの派生なんだが、効率よく儲かるってことは、お金持ちになってアレとかコレとか買えたり、店とか始められたり、もつと言うと、会社とか立ち上げちゃって社長になれちゃったりとか！とかとか！ってことなんだよね。

でも厳密になんの仕事したいとかは全然ないんだ……。働いたら負けかなと思っている。

ああ、それか思い切って趣味全開の店のオーナーとかなら、いいかもなあ……。儲け度外視で商売できるくらい異世界との交易で儲

かったらやれるかもしれないな。デュフツ。

五つ目として。

やっぱ異世界で彼女作ったりとか、胸が熱くなるよな……。

なんてったって異世界、こっちの価値観ではニートの俺でもモテたりとかもありえるかもしれないしな！　かと言って、向こうからアプローチ掛けてくるような慎みのない女はごめんだよ！　彼女いない暦Ⅱ年齢の童帝なめんな！

……ちよつと脱線したかな。でもわりと切実な問題なんだよコレ。

六つ目として。

気になるよね、祝福。

単純に自分がなんの天職があるのか、すっげー気になる。だって現実にはネオニートなんだもん！！

受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！

「受けさせて貰おうか！　異世界の祝福とやらを！」
「ん？　ジローなんか言ったか？」

うわあああ、口に出してた。



これから「記憶喪失」の俺としては、どうしたらいいだろうかとシェローさんに相談してみた。

やりたいことはいろいろ思いついたけれど、記憶喪失のはずの俺がいきなり精力的に活動しはじめちゃうのも不自然だしな。

その際、「どうやら自分は商人みたいなことをしていたらしい。していたんじゃないかな？ 多分？」

などと遠まわし且つ曖昧に言ってみたら、まず神殿で祝福を受け、そこでの天職次第で、対応したギルドに上手く紹介してくれるとのこと。

なんだからずいぶん良い人すぎて恐縮しちゃうんだけど、シェローさん曰く、困っている人に出会うということ自体が、ル・バラカのお導きであって、祝福を受けているものは、その導きに遵っているだけだとか何とか。

要するにそういう宗教観だということなんだろうけれど、シェローさんが特別いい人だけじゃないかという気もしないでもない。

パツと見、山賊みたいなオッサンんだけどなー、人は見かけじや判断できないものだね！

そんなわけで、エリシェの街に向かってシェローさんとレベツカさんと俺の3人と、昨日のイノシシの肉と皮を積んだ荷馬1頭で歩いている。村の手前で街道に出て、シェローさんの家からおよそ2時間くらいでエリシェの街に到着した。

エリシエは、2メートル程度のその気になれば簡単に登れる程度の城郭に囲まれた都市で、石作りの家以外にも煉瓦作りの家も散見でき、赤い屋根の連なりが美しい。

入り口には門番はあれど、普通に開けっぴろげで入り放題出放題。想像してたのよりずいぶんユルかった。



確かに活気のある街だ。

異世界の街というより、イタリアかどこかの外国へ来てしまったかのような感覚に襲われる。が、街行く人をよく見ると、ローブを着た魔法使い風の男やら、猫耳に尻尾の獣人少女やら（ちよっと毛深かめ）、槍を担いだプレートメイルやら、背の低いガチムチヒゲもじゃ親父（ドワーフ？）の集団やら、とにかく種々雑多で、ああ、やはり異世界なんだなといちいち再認識させられた。数でいえば、人間が一番多いようだったけど、亜人というか異世界種族というか、人間以外の種族の方もけっこういるんだよ。

神殿に行く前に肉と毛皮を卸しに行くというので、まずはそれに同行する。シェローさんが肉と毛皮を担いで、買取所らしき建物に入っていくのを見守りなら僕といっしょに残ったレベッカさんに気になったことを質問してみた。

「あの肉と毛皮でどれくらいのお金になるんですか？」

「んー、せいぜい銀貨3枚になればいいところね。それでもうちの食費の半月分くらいにはなるから悪くない額ではあるのよ。最近は猟師が減ったから、少しだけ買取価格が上がったってのもあるしね」

……銀貨3枚で半月の食費というと、銀貨1枚＝1万円くらいの価値なんだろうか？ いや、それは日本の貨幣価値に照らし合わせすぎているか……。

「金貨は銀貨10枚分なんですって？ 銅貨は10枚では銀貨1枚分？」

「金貨はそのとおりだけど、銅貨はちょっと違うわね。10枚で銀貨1枚になるのは白銅貨よ。そして、青銅貨、これね、これが10枚で白銅貨1枚分」

と言って、白銅貨と青銅貨を見せてくれるレベッカさん。白銅貨は厳つくした500円玉の使い古したもののようなコインで、青銅貨は、1セント硬貨に似た小さいコインだった。

うーん、とりあえず10進法で安心した。けど、まだいまいちわからない。

レベッカさんには悪いが、いろいろ質問させてもらおう。

「そういえばお金の単位をしりませんでした。銀貨1枚と白銅貨4枚と青銅貨7枚みたいな場合は、147なんとかって数えるんですよね？」

「おー、ジローくんお金の計算ができるんだね。やっぱり商人見習

いでもやってたのかしら、一般的にはあんまりそういう計算使わないから」

「え、じゃあどうやってるんですか？」

「だからそのまま。銀貨1枚と白銅4枚と青銅7枚、って数えるんだよ？」

うーん？ そんな難しい計算でもなくね？ お金の単位は「エル」だと教えてもらったけど、1銀貨＝100エルとか教えれば幼稚園児でもわかることじゃね？

あんまりっていうかぜんぜん算数が発達してないのかな。大丈夫か異世界人。詐欺に簡単に引っ掛かっちゃうぞ！

「でもレベッカさんはわかるんですよ、計算」

「私は傭兵団で団員への報奨金の計算とか少しやってたからね。簡単なものしかできないけど、お金の計算は得意よー？」

なるほど、納得。

ま、俺も最終学歴高卒様であるからして、算数は苦手だからな。
しかも「読み書きそろばん」のうち、読み書きが完全アウトな異世界人！
チキユウジン

そうこうしていると、銀貨3枚を握り締めたシエローさんが、買取所から戻ってきた。あとでこの金に必要な物の買出しをするそうだが、その前に神殿に連れて行ってくれるようだ。

じゃあ、神殿行ってパツと祝福うけちやおうぜ！ とシエローさん。

ずいぶん軽いな。

第5話 異世界都市は地中海の香り（後書き）

主人公、高卒童貞無職という3冠王。けっして作者に投影しているわけではないです。けっして。

第6話 異世界神殿は妖精の香り

「サルディネーラ！」

神殿は街の中央広場正面に建っていた。そこそこ大きな建物――神殿というより教会みたいなイメージの建物――で、入り口には大精霊のシンボルらしきレリーフが飾られている（牛と蛇と鳥が合体したような謎モチーフ）。入り口から足を踏み入れると、神官と思しき女性がこちらに気付いて挨拶らしき言葉を発した。

「サルディネーラ！ 久しぶりねシェロー、レベッカ」

気さくにシェローさんとレベッカさんに話しかける神官さま。

……しかし、俺にはもっと重要な案件が訪れており、まずはその件について頭を整理しなければならなかった。

神官は、細身の若い女性だった。ゆったりとした若草色のローブ。ローブの上には赤、青、白、緑の凝った意匠のカズラ。

透き通るような輝く亜麻色^{ブロード}の髪を腰まで伸ばしている。

切れ長の眼、白磁のような肌、緑の瞳、……そして、特徴的な長く上がった耳……。

……みなまで言うな！

ドワーフとか獣人とかが街を歩いてた時点で、その可能性に

ついてはいつだって考えていたんだ！

なんてったって異世界。どこからどう見てもファンタジー丸出しの世界！となれば当然の帰結じゃん。

つまりあの神官は、あの耳がちよっぴり長くて、齧ってくださいと言わんばかりに耳なんか尖らせちゃってる神官様は！

エルフだ！ まごうことなきエルフ！！

ゆゆゆゆ夢にまで見た、えええエルフが現実に！ 俺はついに手にいれた！ エルフの国をこの手に！ うおおおおおおおおお
おおおおおおおおお！！！！

俺ディード○ツトとか大好きなんだよ！！

あwse d r f t g y ふじこーぽ；

————しばらくおまちください————

「ではそちらの方が祝福を受けるということでいいのね？」

「あ、はい。ジローといえます。よろしくおねがいします」

「なにモジモジしてんのよジロー。神官さまみたいなタイプが好きなのかしら？」

「ははは、こう見えても神官さまはお前の母親よりもまだ年上だぞ、おそらく。だいたい俺がガキのころ祝福を受けたときからこんな感じだからな、って痛い！」

歳のことを言われてシェローさんの耳を引っ張るエルフの神官さま。

歳のこととか全然気にしない種族かと思いついてたけど、そうでもないのかな。萌えるな。

「そうね、ジローさん、そんなに緊張しなくても大丈夫よ。や・さ・し・く・してあげるから」

しかしこのエルフ、ノリノリである。森の賢者だとか、孤高の種族とか、そんな感じが全然ない。

背もなんか低くて可愛いし、俺得すぎるだろJK。

「冗談はさておき、それじゃ始めちゃいましょうか。じゃあ、ジローさん、祭壇へどうぞ」

少し高くなった祭壇へ招かれる俺。可愛いエルフの神官ちゃん（推定年齢50歳以上）の隣に立つ俺。俺のほうがちょっとだけ背が高いね神官ちゃん。フワツとハチミツみたいな甘い匂いがしてきて、21歳童貞の俺には毒すぎるね神官ちゃん。

俺が脳内でいろんな妄想に花を咲かせているうちに、神官さまは瞳を閉じてなにやら呪文を唱え始めた。どうやら、このまま祝福の儀式がはじまるようだ。

呪文を唱え終わると、「手を」と両手を差し出して来る。俺はその手をドギマギしながら取った。

名前と年齢と性別を聞かれたので素直に「ジロー・アヤセ、21歳、男」と答える。

一瞬、両手に熱を帯びたと思った次の瞬間、辺りをカッと光が包み、そしてすぐに止んだ。

神官はホッと一息をつくと言った。

「おめでとうございます。ル・バラカはあなたを精霊の御子と認め、祝福を授けられました。これより大精霊はいつでもあなたを見守り、あなたを助け、あなたを導いてくださります。実りある人生となりますでしょう」

「あ、ありがとうございます？」

……困った。こんな一瞬で祝福とやらは終わりなのか。ぶっちゃけぜんぜん変化がない。

祝福を受けてなにかが変わったという感じがしない。

やっぱ異世界人だしちょっと違うのかな？

「ジロー、それでどう？ 天職はなんだったー？」

「この瞬間はいつ立ち会ってもワクワクするな！」

早く天職がなんだったかと教えろとシェローさんたち。

いやしかし、ぜんぜん変化なしなんですってば。どないせえっちゃうねん。

「シェローもレベッカもあせらないで。彼はまだ天職の見かたもしらないんですから……。ジローさん。集中して。『天職、天職、天職……』と念じてみてください。それで自分の天職を見ることが出来ますから。最初は時間がかかるかもしれないかもしれませんが、すぐに慣れますからね。慣れればすぐに”出せる”ようになりますよ」

またフワつとした説明だな。レベッカさんの説明はコレの受け売りか。

しかし、ともかくやってみるしかないか。

「天職、天職、天職……」

念じてみると、目の前にパッと半透明の石版のようなものが出現した。物理的に板が出るとは思いもよらなかったので驚いたが、内容も予想の斜め上だった。

板にはこうあった。

【名前】

ジロー・アヤセ

【年齢】

21歳

【性別】

男

【種族】

人間

【天職】

ソードマン
剣士

ウィザード

魔術師

ブラックスミス

鍛冶師

クラフトマン

細工師

トリックスター

詐欺師

トレイダー

商人

コック

料理人

ジェモロジスト

宝石学者

【固有職】

ザ・ライブラリー

異界の賢者

〈スキル〉

ザ・ジャーニー
異世界旅行

〈スキル〉

ザ・プリンシプル
世界の理

〈スキル〉

ザ・ジャッジメント
真実の鏡

【バラカのお導き】

・ 猫師夫婦にお礼をしよう

0 / 2

・ 真実の鏡を使ってみよう

0 / 1

天職多っ！ しかもなんか凄そうな固有職まであるんですけどお…

…。
しかもバラカのお導きって……。これってひょっとして、いや、ひょっとしなくてもRPGでいうところの「クエスト」じゃね？
ご丁寧に進行具合まであるし。なぜだか全部日本語だし。

ワクワク顔のシェローさんとレベッカさん。神官さまも可愛い顔でどうだった？ と首をかしげている。なにこの可愛い生き物。俺がドンファンだったらここまでで20回は口説いてるよ。

「えっと、この天職ってのでもいいんですかね。なんか多いけれど…
…、剣士、魔術師、鍛冶師、細工師、詐欺師、商人、料理人、宝石学者……」

「ちよっ、ちよっと待ってジロー、多いってどういうこと？ 今言ったのがみんな天職だって言うのー？？」

レベッカさんが困惑顔で聞いてくる。シェローさんも頭に？？？を浮かべている。神官さまが難しい顔をして俺に質問してきた。

「ジローさん、……天職は今言った8つあったんですか？」

「えっと、はい。8つです。……『天職』の括りで表示されてるの
で間違いないと思うんですが……」

「そうですか……。まず、一般的には天職は1人1つです。時々複数の天職を持っている方もいますが、2つの天職を持っている方で

30人に1人、3つなら100人に1人、4つ以上となると1000人に1人いるかどうか……。まして、8つともなるとちよつと例がありません。『夢幻の大魔導師』ですら天職は6つだったと言われているし……。あ」

突然「思い出しましたわ」と言わんばかりに瞳を輝かせるエルフ神官ちゃん。なになに、急に近づいてこないで、童貞心がビツクリしちゃうよ！

「ひょっとして……。『固有職』を得たんじゃないですか？」

さて……。どうするか。

第6話 異世界神殿は妖精の香り（後書き）

主人公がエルフ好きなのは、けっして作者の嗜好を投影しているわけではありません。けっして

第7話 異世界天職はチートの香り

「こゆうしよく？　ですか？　そういうのはアリマセンネ」

誤魔化すことにした。

可愛いエルフちゃんに嘘を付きたくはなかったが、「異界の賢者です！」とか不審すぎるだろう。異界でもストレートすぎるしな。

そうですか……と、なぜかちょっと残念そうなエルフをギュッと抱きしめてお持ち帰りしたいのをグツと我慢して、逆に質問した。

「固有職って、天職とは別にそういうのがあるんでしょうか？」

我ながらわざとらしい質問だが、訝しがることもなく答えてくれたことによると、4つ以上の天職を得た人の中には、天職の他に「固有職」というその人だけの職を得た人がいたらしい。エルフちゃん^{ザ・ヴェノム}が知ってるのは、『悪意の沼』^{ザ・ミラージュ}『夢幻の魔導師』^{ザ・シルエット}『影』の3つで、中でも夢幻の魔導師ってのは、100年以上前にエリシェで祝福を受けた有名人なのだそうだ。

悪意の沼だの影だのという、なんとなくヒールの気配がする連中は、昔話に出てくるような大昔の人で、伝説だけが残っているんだとかなのか。

「固有職を得ると、1つだけその人だけが使える特別なスキルを得られるようになるらしいんです。『夢幻の大魔導師』はそのスキルを使って、たった一人で千の軍勢を止めたと聞いたことがあります。スキルの名前は伝わっていないのでわからないのですけれども……」

俺……、1つどころか、3つあるんですけど……。スキル……。

やっぱ内緒にしておいてよかったな。千の軍勢を止める力はなさそうだけど、変な注目を集めるのは間違いなさそうだし。いや、エルフちゃんの注目を浴びるのはやぶさかでもないんだけれどね、一般人の熱視線はいらないや。商品仕入れに行く時以外は家に引きこもってたから、視線とかちょっと苦手なんですよね。

固有職の件は「なるほどすごいものなんですネー」とわざとらしくかわし、気になっていた件を聞いてみることにする。

「ところでですね、祝福を受けても、特になにが変わったという感じもないんですが、天職を得るとどういった違いがあるんですか？

僕、全然体感できないから不安で……」

「それは天職に対応した職業に実際に就くか、修行するかしなければ、なかなか体感はできませんよ。天職は要するに『その職の才能がある』ということですから」

「才能ですか。あ、普通はもっと若く祝福を受けるって言ってましたね。つまり天職があっても、それを若いうちから磨かないと大したアドバンテージにはならないって意味だったんですか……」

「ええ、普通は10歳で祝福を受けますから……。そういう部分があるのは確かに否定できません。けれど、悲観的になる必要はありません。天職持ちはおよそ5倍は速く物事を吸収して成長ができます

すからね。まだこれから良い経験をいくらでも積めますし、成長したいという気持ちがあるのなら、苦難もまた楽しく感じられるはずですよ」

「ご……、5倍ですか。それはすごいですね……」

なるほど。

5倍の効率があるなら、そりゃあ天職以外の職は仕事にしないよなあ。でも逆に言うと、天職が出た職にしか就けないということなんじゃないか？ 俺の天職に詐欺師ってあったけど、詐欺師オンリーの天職の人って相当微妙じゃね？ 地元じゃ「あいつ詐欺師だぜ」と囁かれ下手すりゃ村八分だ。なにをしても信じてもらえず、誰も自分のことを知らない町から町へ詐欺を働きながら世界を旅する根無し草。この詐欺師の才能が憎い！ どうしてこんなに簡単に騙せちゃうんだよおおおお！ とか言いながら日々を過ごすのか。人事ながら可哀想になってきたわ。天職システム酷すぎるだろ。

「5倍って言っても、伸び代は人それぞれだよジロー。効率の良い修行してなきゃ、天職なしでも努力してる子にはかなわなかったりするものよ？ 傭兵団の中には戦闘系の天職持ちじゃない人もいたけど、けっこう努力や経験でカバーしてたしねー。まあそれでも努力してて経験も積んでる天職持ちにはなかなかかなわないんだけどさ……」

まあ、確かにそうかもしれない。毎日1時間修行する天職持ちと毎日5時間修行する天職なしが同列であるなら、絶対に覆せない差ではなさそうではあるな。毎日1時間の勉強すらできずに高卒ニートになった俺だからわかる。

——しかし天職8つか。どの天職もまあ、いちおう心当たりがあるというか、長いニート暦のなかで齧ったことがあるようなものがほとんどだったりするのがアレだけど、そんな簡単なことでいいんだろうか。

あ、魔術師だけは心当たりないな。

いや……待てよ、ひょっとしてあれか？ 20歳過ぎて童貞だから魔術師の才能があるとか出たんのか？ え？マジで？ そういう基準で魔術師になっちゃうわけ？ 10歳で祝福受けて魔術師の才能あったら絶望するんじゃない？ ヤラハタ（ヤラずにハタチの略）確定じゃね？

さっき魔術師の天職もあるって言っちゃったけど、あれって「自分童貞です」（キリッ）て宣言したもの同然だったんじゃない？ 天職システム酷すぎるだろ。

うわああああ



エルフ神官ちゃんに「僕のことは内緒にしてください。天職が8つあるとかで注目を浴びたくないんです」とお願いして、神殿を後にした。本当はお布施をするものらしいんだけど、今のところは一文無しだからと免除してもらった。ま、稼いだらエルフちゃんが惚れるくらいお布施しちゃうわい。

「さあ、ジロー。次はギルドに行くんだが……、どこのギルドにするんだ？ それだけ天職があるとどこでも選べるが」

とシェローさんに神殿を出たところで聞かれる。

「商人の関係のやつでお願いします。……えっと、そのギルドではなにをするんですしたっけ？ すみません無知で」

「よそから来た人間はギルドで登録して住人登録をするんだよ。そうすれば、この街で商売をしたり就職したりできる。本当は他の都市から来た人間は紹介状がなければ登録できないがな、まあ、そこは上手く紹介してやるよ」

「なにからなにまで本当にありがとうございます。本当に助かります」

俺がお礼をすると、突然『天職板』（俺命名）が目の前に現れる。天職板は淡く光っており、良く見ると「バラカのお導き」の「猟師にお礼をしよう0／2」が点滅しており、「猟師にお礼の品を贈ろう1／2」にヌルツと変化した。猟師にお礼をしたことによりクエストが進行したらしい。次はお礼の品を贈ればコンプリートか。

「じゃあ、商工会議所に行くとするか。中では俺がジローを紹介す

るからな。適当に合わせてくれ」

「は、はい。よろしくおねがいします」



商工会議所は思いのほか大きな建物だった。レンガ作りのちよつと洒落た建物で2階建て、無骨な石作りの建物が多いエリシェの街の中ではなかなか存在感がある。

入ってすぐの受付でシェローさんが「トビーはいるかい？」と受付嬢に声を掛けると、奥のほうからシェローさんより少し年下くらいか、30歳前半くらいの眼鏡の男を呼んで戻ってきた。

「仕事場ではトバイアスと呼んでくれよ、シェロー。こっちに顔を出すなんて珍しいじゃないか。しかもレベッカさんも同伴で……。レベッカさんもお久しぶりです」

「久しぶりねー、トビー君。今日はちょっとお願いがあつてきたのよ」

「お願い？　また魔結晶の買取りですか？　それならこっちも得にはなれど、損はしないからいくらでも受けさせてもらいますよ」

「ああ、違う違う、今日は全く別件なんだが……。おい、ジロー」

シェローさんに呼ばれてトビーと呼ばれた男の前に出る。シェローさんともレベッカさんとも親しげに話をしているから、旧知の仲なのだろうか。眼鏡の奥の目は鋭く、一筋縄ではいかない気配を漂わせていて隙がない。

「このジローはレベッカの姉の子、つまり甥なんだがね、エリシェで商人をやる為に帝都から出てきたんだが、途中で強盗に襲われて幹旋状を奪われてしまつてな、いや参った参った」

「……つまり幹旋状なしで登録してほしいってわけかい？ シェロー？」

うわあ、なんかこの嘘わざとらしくね？ しかもレベッカさんの甥設定で無理あるだろ。似てないを通り越して人種が違うレベルなのに……。せめて俺にも一言言っておいて欲しかった……。

シェローさんが頷くと、胡散臭そうに俺をジロジロ見てくるトビー氏。どう見ても嘘が見破られています。本当にありがとうございました。

シェローさんに任せるのは無理くさいと判断。脳筋キャラに交渉を任せた結果がこれだよ！俺がなんとか補足して、トビー氏を納得してもらうしかねえ。

「……トバイアスさん。実は僕は記憶を失っておりまして、このシェローさんやレベッカさんの甥……らしいのですが、その記憶がないんです。幹旋状という物も持っておりませんから、状況証拠から考えると強盗に襲われた際に頭を強く殴られたかして記憶を喪失し

たと思えるのが妥当なのですが……」

「つまり、君がレベッカさんの甥だというのは、シェローとレベッカさんの証言しかないというわけだね？」

「……証拠はなにもありませんから。」

俺がそういうと、トビー氏は瞳を閉じて少しだけ思案し、言った。

「……レベッカさん、彼は確かにあなたの甥で間違いありませんか？」

「そうよー？ ジローは間違いなく私の甥だわ。目元なんかジェシカ姉さんにソックリ」

あっけらかんとした調子で肯定するレベッカさん。

「……………そうですか……。確かに着ている服は帝都の物だな……。君、ジロー君と言ったかな。商人に關係する天職はなにか持っているのかい？」

「あ、はい。トレーダー ジェモロジスト 商人と宝石学者です」

と、とりあえず二つだけ言っておくことにする。またツラツラ8つも言っても逆に不審だしな……。

商人と宝石学者を選んだのは、まあ、単純に仕事になりやすそうな天職だなと思ったからに過ぎない。細工師や鍛冶師でも良かったけど、そうすると商売ってより職人仕事になっちゃうしな。

「ほう、ダブルジョブでしかも宝石学者とはね……」

ジッと僕の目を見つめるトビー氏。ジッと見つめ返す俺。

緊迫した雰囲気が続いていたが、フウと息を吐きシェローさんを見て観念したように肩をすくめてトビー氏は言った。

「……ま、そういう事情なら仕方がないなシェロー。ここはお前の顔を立てて俺の権限でその子を登録してやるよ。……今度なんか奢れよ?」

どうやら、なんとか上手くいったらしい。

記憶喪失というところを明かさないと、善良なシェローさん夫妻を騙している不審者にしか見えないからな……。

トビー氏はシェローさんの嘘には気付いていただろうが、シェローさんとレベッカさんが俺を保護しようとしているという意図を汲み取ってくれたというわけだ。良い人でよかった。

登録方法は青白い金属板に血を垂らして、それを職員が奥に持っていく、暫くして戻ってきた職員の手には二つに割られた先ほどの金属板があり、「これがギルドカードとなります」と言われ片方を渡され、あとは羊皮紙に名前と天職を記入し、それだけで終わってしまった。

ギルドカードはいわばエリシエでの住民票に近いものらしく、これがあれば店も立ち上げられるし、就職もできるし、家を買ったりもできるんだそうだ。俺始まったな。

さあて! 祝福も受けた。ギルド登録もした。

しかし、そろそろ一回家に帰らないとなあ。昨日は無断外泊だったしな……。

第8話 異世界店舗は興奮の香り

「お2人のおかげで祝福も受けましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。……お礼といってもこんなものしか持っていないんですが、よかったらこれを使ってください」

と言って、店で売らなかったボウイナイフをシェローさんに渡す。これをシェローさんが受け取れば、「クエスト 1 猟師にお礼の品を贈ろう／2」の”お導き”のクリアとなるはずだ……。



商工会議所を出てから、3人でお昼を食べに行くことになった。無一文の俺としては、これ以上の借りを作るのもあれだったので、断ろうとしたのだが、「若いもんが遠慮してんじゃないよ」とレベッカさんに押し切られてしまい、異世界外食初体験と相成ったのだった。

シェローさん御用達の店は、商工会議所から10分ほど歩いた場所にあった。

パッと見の印象は屋台村。石畳の上に置かれたテーブルやら長イスに、客が思い思いに陣取って飲食している。

料理は道沿いの店舗で買うか、注文してから運ばれてくる方式のようだ。道幅せいぜい5mあるかどうかというところにテーブルやらイスやら置かれ雑多な客達が飲食しているせいで、かなり窮屈な印象がある。

なんだこれ、今日は祭りか？

レベッカさんが食べ物注文に行くのについていくことにした。半分は食事の値段のリサーチの為。半分は興味本位で。

レベッカさんが慣れた調子で注文していく。

ギョーム（鶏みたいな肉）の串焼き5本で20エル。パエリア（のような米料理。具沢山で美味そう。なんか赤い）大盛り2杯で40エル。豆のスープ3杯で15エル、ナンみたいなパン3枚で15エル。リリアラム（赤い果物）3個で10エル。

しめて、100エルなり。

つまり銀貨1枚だ。あれ？ 銀貨3枚で半月分の食費とか言っていなかったのか。買いすぎなのか、それともここが高いのか？ シェローさんちの家計が心配です……。

つか、1食で半月分の食費の3分の1使っちゃってるんですけど……。

テーブルではシェローさんがセルフサービスらしい茶を用意して

くれていた。飲んでみると香ばしくて美味いが飲んだことのない味の茶だった。茶葉を見たら猫ジャラシに似ていたので、とりあえず猫ジャラシ茶と命名しておこう。

鏡の屋敷がガチ西洋風だったから、西洋的な文化の世界のイメージがどうしても拭えないんだけど、実際はどうも猥雑だ。

茶碗で茶を飲むし、普通に米があるしな。……まあ、こういうほうが好みだからいいんだけど。

そうこうしているうちに料理が運ばれてきて、みんなでいただいた。

——どれもこれも予想以上に美味しい！

ギョームの串焼きは硬めの鶏肉という感じだろうか、ウイキョウに似た香草と塩で味付けされていて、風味がいい。

パエリアは赤い見た目に反してマイルドな味わいで、やわらかく煮えた香味野菜とかたまり肉も味が染みている。米は日本米よりタイ米に近いようだ。

スープには豆のほかに卵も入っていて健康に良さそうだ。

ナンのようなパンは、ナンというよりは、ピザの耳の部分という感じだった。うっすらと油が垂らしてあり、オヤツ代わりにこれだけで食べても良さそうなくらいだ。

やばい、異世界やばい。食い物超美味い。

銀貨1枚だから高いかとも思ったけどこの味なら納得だわ。それに量も半端ねえ。

パエリアの大盛りって米5合分くらいあるんだもの。それが2つ、つまり1升分くらいあるんだぜ。まったくシエローさんもレベツカ

さんも大変な健啖家だよ。

3人でガッツ食いして完食。

最後にデザートとしてリリアラムというフルーツをいただいた。
見た目はマンゴーに似ているが、マンゴーより酸味の強い少し硬めフルーツで、この辺では食後に良く食べるもののだそうだ。サイズも大きめ（リングゴより一回り大きいくらい）のこれが1個4エル、3個でまけてもらって10エルだった。

しかし、1エルの価値が日本円に換算してどれくらいなのかいまいち掴めない。日本だったらばあのパエリアなんて1杯3000円以上すると思うけど（なにせ量が量だ）、それで試算すると1エルは150円だ。

最小単位が150円ってありえないだろ……。いや……。ありえるのか？ 異世界に地球の常識を持ってきても詮無きことなのかな？？

まあ、ひとまずこの件は保留としよう。日本のものを売却すればその額で判断できるだろうしな。



「シロー。いくとこないんだろうし、しばらくはうちに居候していてもいいわよ。ベッドもあるし……。街からはちょっと遠いけれどね」

食後の茶を飲んでるときにレベッカさんが唐突に切り出した。シエローさんもウムウムと頷いている。

提案としては非常に嬉しい。見ず知らずの、記憶喪失で、内陸の服を着て、天職が8つもある、正体不明の小僧に対しての待遇としては、なんとか良すぎる。良い人すぎて不安になるレベルだよ。

でも、さすがにそんなに甘えるわけにもいかないし、なんと言っても一回家に帰らないといかん。親になんにも言っていないし、ネットオークションに出品中のものもそのままだし。

折角の厚意に心苦しい限りではあるが……。

「僕みたいなものにそうまで言ってもらえるのは、非常に嬉しいんですが、さすがにそこまで甘えるのは心苦しいので、なんとか自分でがんばってみようかと思っています。この手持ちの品を売れば少しはお金になると思いますので……」

そう言って自衛の為と思って数本持ち込んでいた自作のナイフをテーブルに広げた。

——ナイフ作りとの出会いは中学1年生のころだった。

中学の時の部活の顧問が技術教師で（数学も教えていたが）、その彼が副業でカスタムナイフビルダーをやっていて、放課後にナイフを作っているのを見ていたらいつの間にか自分もハマってしまい、今でも半年に1本くらいのペースで作り続けている。

まあ、その技術教師と今だに付き合いがあるから材料を安く譲ってもらったり、工具を貸してもらったりして、ニートになっても続けられているんだけどな。鋼材はともかく電動工具なんかは自分じ

やなかなか買えないし。

シェローさんが興味深そうに大振りな一本を手に取り、品定めするように見始める。

武器になりそうなもの……、と思って、手持ちで一番刃渡りの長いボウイナイフを持ち込んだ物だ。

全長で35cm、刃渡り20cmの分厚いナイフで、個人でこのサイズを作る人はあまりいないかもしれない。日本で持ち歩いたら発見次第即御用だが、自分で愛でる用に作ったから問題はない。

鋼材はATS-34。ナイフ用ステンレスの定番だ。

革のさやシースも自作。牛革製で細かいカーヴィングも施してある自慢の一品だ。

「良いナイフだな。仕事柄刃物はいろいろと見てきたが、こんな顔たかが映るほど磨かれた刀身は初めてだ。作りも丁寧だし、かなり高価い品なんじゃないか？」

と、ある意味刃物のプロとでもいうべきシェローさんにも好評なようだ。

「かなり高価」がどれくらいの金額を指すかはわからないが、無名の素人の自作品なので、たとえネットオークションに出しても1万円にもなれば良いほうだろう。まあ、ネットでなんか売る気もないけど。

「記憶がないもので、どういう謂れの品かはわからないのですが、僕も良い品だと感じます。何本か売って、しばらくの活動資金になれば……、と思うのですが」

「そうだな。これならばかなりの金額になるだろう。知り合いの道具屋のところで頼んでみよう」

「あ、ありがとうございます！」



こっちの世界に持って来ていたのは、例のボウイナイフの他には、小ぶりのドロップポイントのシースナイフを2本、中サイズのハンターナイフが1本である。ボウイナイフは特別手が掛かっている品なので売るつもりはないが、シースナイフとハンターナイフは売ってしまうつもりだ。

全部で金貨1枚にでもなればしめたものだが……。

シェローさんの知り合いの道具屋は、予想に反して大店だった。

どうしてもRPGの印象で物事を考えるからか、例の大作RPGの道具屋的なものを連想してしまっていていかん。「いらっしやいませ。ここは道具屋だ。なににするかね。ここで装備するかね。120Gだがいいかね」みたいな、オッサン1人でやってる5坪くらいでやってるちっちゃな店をね。

道具屋は「ミーカー商会」と言い、このへんでは一番大きい店な

のだそうだ。中に入ってみると、道具屋というよりは武器防具の店といった感じだった。

店内は5坪どころか30坪くらいはありそうだ。売っている品物は……………、RPGだコレ。

「ここは武器防具の店だ。なににするかね。ここで装備するかね」
っというアレだコレ。

剣、ナイフ、槍にメイスにワンドに斧に鎧に盾に籠手にスネ当て。外套も服も靴も売っているし、旅に使うであろう道具、寝袋やロープや鍋とか食器とか、照明に使う松明やらランタンやらもある。

……………楽しい!!

俺こういう店大好きなんだよ!

ここでなら半日は時間つぶせるわぁ。

夢中になって武器や防具なんかを見ていると、シェローさんが呆れたように呼びに来た。

……………すみません、つい夢中になっちゃって……………。ほんとこういうのに目がないんですよ…………。

シェローさんが店主に涉りを付けてくれ、ナイフは買い取ってくれるから、とにかく見せてみてくれとのこと。

ボウイナイフ以外のナイフを取り出して、カウンターに並べる。

店主は40がらみの筋骨隆々のハゲ親父だ。強そうな見た目に反

して、目つきは優しげだ。

「……このへんでは見ない品だな……。とすると内陸産か、あるいは山岳のほうの作か……？　いったいどうなっとなるんだコレは」

などとブツブツ言いながら検品を行っている。

すみません、それ地球産なんですよ。厳密には俺作なんです。――とも言えないので、黙って検品するのを見守った。

どうやら事前にシェローさんが俺が記憶喪失だと言ってくれてあったようで、必要以上の詮索をされることもなく査定が終了した。

「待たせたな。――結論から言うと、こいつを売ってくれるなら全部で金貨10枚出そう」

「えっ!？」

軽く絶句してしまった。10枚!？

金貨10枚って日本円に換算して……、さっきの暫定的な試算の1エル＝150円で計算するとあんた、金貨10枚はつまり10000エル……。

……150万円やで。

「――ああ、勘違いするなよ。ナイフとしての価値で言うなら金貨1枚くらいのものだぞ。……ただな、このナイフの製法は今のところまだこの国には伝わっていない、俺でも始めて見るものだ。さら

に鋼材もわからん。比重から考えると鉄のようなんだが……。ハンドル材も見ることがないものだ。要するに、なにからなにまで謎だ
ってことだ」

そりゃあそうだろうな。鋼材は日本製のステンレスだし、ハンド
ル材はマルカイト（米製の人口合成素材）なんだから。

「……つまり謎を買い取ってくれるというわけですか？」

「謎、というよりは信用だな。記憶喪失ということだが……。例え
ばだな、お前がこいつを『帝都』か『山岳』あたりからサンプルと
して持って来る途中で記憶を失ったものとする。それで、無一文だ
からとうちに持ちこまれたとして、新しい技術の粋を凝らして作ら
れたものと解っているのに買い叩くわけにはいかんだろう。店の信
用と、なによりプライドの問題としてな。だから金貨10枚だ。ま、
そのかわり、このナイフの製法については研究させてもらうがね」

なるほどな。確かに俺が商人でよその国から新しい品を売るため
のサンプルを持って来た使者とするなら、記憶喪失なのをいいこと
にカモネギよろしく買い叩くってわけにもいかないんだな。

しかし、サンプルとか言うってことは、俺が商人に見えるってこ
となのかな？

「商人でなけりゃ、あれだけ熱心に店の商品をチェックしたりはし
ないさ。記憶を失ってもそういうところは変わらないものなんだな
！」

と、ワハハと笑う店主。

なるほどねー。アイテム好きただの物好きただけなんだけどな。商人の天職は
あるけれど。

ま、高く買い取ってくれるのだから、素直に甘えさせてもらうことにしよう。これで当面の活動資金には困らなそうだから、素直に嬉しい。

しかも金貨だったら、ひよつとして向こうに戻ったら換金できるかもだし……な！

「じゃあ商談成立だな。ちょっと待っててくれ」

そう言って金貨を10枚取り出し、青い巾着袋に入れてくれる。それを受け取りズッシリとした重みを感じながら、シェローさんとレベッカさんに向き直って言った。

「シェローさん、レベッカさん、本当に何から何までありがとうございました。お2人のおかげで祝福も受けられましたし、ギルド登録もできましたし、この街で活動する資金もできました。お礼といってもこんなものしか持っていないんですが、よかったらこれを使ってください」

そしてバッグからボウイナイフを取り出しシェローさんに渡した。

第9話 異世界クエストは現実の香り

「いいのか？ いや、嬉しいが、これはお前の記憶を取り戻す鍵になる品なのかもしれないんだぞ？」

「あ、はい」

あ、はい。じゃねえええええ。

記憶喪失設定なのに持ち物簡単に手放しちゃオカシイってことに、全く考えが回らなかった……。

でもまあ……、実際には記憶喪失ではないのだし、いいか！
もう、そういう人ってことで理解してもらおう！

「そうですね。今のところはそれを持っていたてもなにも感じるところありませんし、構いません。記憶のことは少しづつ取り戻せば良いかと思っていますしね」

シェローさんは一応それで納得したのか、それとも意外とナイフが欲しかったのか、それ以上の追求はせずナイフを受け取ってくれた。

受け取ってくれたことによって「これでクエストクリアとなるん

かなー」と考えていると。

突然輝きだす俺とシェローさん。
そして浮かび上がる俺の天職板。

そして……。

ポンッ。

と小気味良い音を立てて、天職板が手のひらサイズの可愛い妖精さんになった。マジか。おちつけ。

「よおよお、はじめましてだな。アホみたいなツラしやがって。ハイこれオメデトウの品物。大事にしなくてもいいけど”ハジメテの精霊石”は記念に取っておく奴が多いらしいぜ。じゃあな。これからも世のため精霊様のためにガンバツてくれよ」

ポンッ。

……………え？

なにいまの？ 白昼夢とかの類かな？

手のひらに青い石みたいのが乗ってるから夢じゃないのかな？

助けを求めるようにシェローさんのほうを見ると。シェローさんの手にも俺のと同じような石が乗っていた。…………どゆこと？

「シェローさん、今のは？」

と聞くと、俺の手に石があるのを認め、肩を抱くように言った。

「おお、ジローもお導きを達成したんだな、おめでとう！俺のほうも今達成となったよ！」

「えっと？　つまりどういうことです？」

興奮しているシェローさんを横目にレベッカさんが詳しく説明してくれた。

お導きを達成すると、天職板が精霊の形を宿し、その精霊が達成の記念として「精霊石」という石をくれるのだそうだ。この精霊石は大精霊の加護そのものと考えられていて、見た目がまるつきり宝石ということを抜きにしても、非常に高額で取引されるものなのだそうだ。

なので人々はお導きがあれば、みな積極的にそのお導きを「達成しよう」とがんばるものなのだそう。

シェローさんの手にも精霊石があったのは、彼もまたお導きを達成したからで、そのお導きってのはつまるところ……、俺との出会いのところから発生したクエスト……ってことだよなあ。確かにお導きに遵っているだけとかなんとか言ってたけれどもなあ……。

「……そうだったんですかあ……。ふふふ」

俺を助けてくれたのが彼の無償の善意だったわけではないことに

微妙な落胆を覚えているらしい自分のピュアさになんとか笑えてき
てしまっていた。

そんな事気にするようなタイプじゃないと思ってたんだけどな、
自分のこと。

それに……、実際結果オーライなのだし、俺なんて記憶喪失とい
う嘘をついているんだしな。固有職のことだって隠しているし。
だからなんか言えたような義理でもないんだけどな。

やっぱりなんだかんだ言っても慣れない異世界で心が弱ってたのか
な。

急にどうでもよくなってきたな。……もうとにかくすぐに
日本に帰りたくなったなあ。

そう思ってしまったら、もうどうにも駄目で。

「……それでは、本当にありがとうございました。また、落ち着い
たら伺わせていただきますね。それではっ」

そう言って身を翻し、2人から逃げるように店を出た。

いや、実際に店を出てから全速力で走って逃げた。

後ろでレベッカさんが「ちょ、ちょっと待ちなさい」とか言っ
ているのが聞こえていたけれど、呼び止められるほどに、もう止まれ
なくなってしまった。

自分でもよくわからない気持ちに支配されていた。
走って走って走って走って、一気に街道に出て、そこからも休ま
ず走って鏡の屋敷に辿り着いた。

そうして1日ぶりに自分の部屋への帰還を果たしたのだった。



部屋に帰ってきて、母親に無断外泊の件を適当に弁明して、コーヒーを飲んだらもう普通に落ち着いてしまった。

我ながらいったいなんなのかと思う。心が弱すぎるから、あんなことで逃げ出したりするんだと理解はできるけれど、だからといってなにをするつもりもありはしなかった。

今は金貨と精霊石とギルドカードを机に並べている。

シエローさんとレベッカさんから、事実上逃げてきてしまった件については、ひとまず自分の中で保留とすることにした。バイトばっくれ経験多数の俺にすれば余裕でした。

……もう少し落ち着いて、自分のなかであの感情を噛み砕くことができたならまた挨拶に行くことにしよう。

いよいよ、これからの異世界での商売について考える。

今、手元にある資金は、異世界の金は金貨が10枚。あと一応換

金でできるらしい精霊石がひとつ。日本円はコツコツ貯めた虎の子の87万円。

この資金でうまいこと商売をはじめたいわけだが……。

しかし、実際に商売を始めるとなると、まずは誰かしらか事情の知る協力者がいないと辛いものがあるんだよな。いちいち記憶喪失だからとか言い訳しながら情報収集するのに疲れたってのもあるし、なにかあったときのためにボディガードも欲しい。

剣士の天職があるから向こうで修行するって手もあるけど、生兵法は大怪我の元ともいうしな。やめておいたほうがいいだろう。

剣は欲しいが。

身を守るにはやっぱ傭兵でも雇うのがいいのかな？ でも傭兵ってのもなあ……。なんか裏切られて後からバツサリ！ みたいなイメージがあるしなあ。

傭兵なんかより、神官ちゃんとかがアルバイトでやってくれないかなあ。「こここれこれも仕事のうちだよ。だよ」とか、いろいろ楽しそうだけどなあ。

——そうだ。エルフだ。

商売もいいけど、エルフのこと調べないといかん。神官ちゃんしかまだエルフ見てないから、どれくらいの場合で街にエルフ住んでるのかわからないけど、エルフ見つけてお友達にならないといかん。なんなら金貨の1、2枚もちらつかせてでも……。

ハッ！ いかんいかん。

まあとにかく一度神官ちゃんのところに行って、エルフ情報を聞いたり、記念写真撮ったりしてこよう。それでブロマイド作ってこっちで売ろう。隠し撮り写真集とかでもいいかもしれんな。1万部

くらい売れるんじゃないかな。

ハッ！ いかんいかん。

あと活動拠点をどうするかも考えないとかん。とりあえずは鏡の屋敷でいいのかもしれないけど、屋敷の権利とかどうなってんだ。異世界のそういうのってよくわからんぜ……。いずれトビー氏にでも聞いてみよう。

それで俺、エルフと新婚生活するんだ……。

とにかく、最初は異世界での足場固めをすることにしよう。お金稼ぎ自体は向こうのほうが容易ではあろうし、軍資金も多い。

こっちでの活動は後回しだな。

……いや待てよ。

こっちの世界ではまず種まきからやっておくか……。

俺はP Cを立ち上げると、いきつけの巨大匿名掲示板群にスレ建てするのだった。

【速報】俺んちの鏡が異世界と繋がった

1 ..名も無き妖精

今朝起きると部屋にある鏡が異世界へ繋がってたんだけど

なんかアドバイスある？

第10話 異世界金貨はプチブルの香り

2 ..名も無き妖精
鏡叩き割って寝ろ

3 ..しまった！ここは糞スレだ！

＜○√
＝

くく
オレが止めているうちに他スレへ逃げろ！
早く！早く！オレに構わず逃げろ！

4 ..名も無き妖精
異世界のお姫様の着替えシーンが覗けるんですね

5 ..名も無き妖精
いいからはやく写真うpしろy

6 ..名も無き妖精
この手のスレ何度目だ
雑談スレでやれ

〃〃糞スレ終了〃〃

7 ..孤独の俺◆4noig329de

どんなふう繋がつてるのか詳しく説明してくれよ
見えてるだけなのか向こうにいけるのか

全身鏡なのか手鏡なのかでぜんぜん違うだろ

8 ..名も無き妖精

ネタにマジレスカコイ

9 ..名も無き妖精

どんな風に繋がってるのか・・・

1本のスジに決まってるだろう

10 ..名も無き妖精

通報しました

11 ..名も無き妖精

1まだあ？

12 ..1

鏡から異世界行ってきました

鏡の向こうは中世の屋敷(廃屋)だったよ

そこにいた異世界生物の写真撮ったからうpしとくよ

今からもっと冒険してくる！

他にもなんか面白いもん見つけたら写真撮ってくるわ

<画像アドレス>

13 ..名も無き妖精

向こうに行けるって設定か

1が向こうに行ってる間に鏡割っておいてやるよ

14 ..名も無き妖精

グロ貼るなボケェ

15 ..名も無き妖精

怖くて開けないんですが、どんな画像？

16 ..名も無き妖精

でかいゲジゲジ

17 ..名も無き妖精

ゲwwwwジwwwwゲwwwwジwwww
どう見てもクモだろこれwwwwww

18 ..名も無き妖精

なにこれ？

19 ..名も無き妖精

あし多くね？

あし多くね？

20 ..名も無き妖精

ガチじゃんコレ

21 ..名も無き妖精

1はプロCGクリエイター

22 ..名も無き妖精

<<21

よかった・・・脚の多い巨クモはいなかったんや・・・

23 ..孤独の俺◆4noi g329de

やけに展開早いな!

気をつけて行って来いよ!

24 ..名も無き妖精

さっそくこのクモ擬人化しようぜ!

25 ;名も無き妖精

異世界の蜘蛛だから

異^{いく}蜘蛛たんですね

26 ..名も無き妖精

イクッ!イクッ!イツちゃう!

27 ;名も無き妖精

いい加減にしろよ

そこはアナザーワールドのスパイダーだから

アナルちゃんだろう

28 ..名も無き妖精

なぜそうなるwww

こんな調子でレスが続いていく。

よかった、アホばかりで。

とりあえずスレのほうは適当にレスしながら運用するとして、写真が足りないから次はちゃんと撮影もしなきゃな。



今日は異世界には行かないことにして、こっちの世界のことを整理することにした。

オクで出しているものは一度すべて引き上げておく。幸い入札入っている商品がなかったから助かった。

親にはちよつとデカイ仕入れ先を開拓したからしばらく留守がちになると言っておく。まあそれで嘘ではないからな。

あと、部屋には絶対入らないように釘を刺すことも忘れない。まあ、母親にそんな釘を刺してもまさにヌカ釘なだけだな。入ってくるときはどんどん入ってきちゃうだろうし。普段は鏡には布でもかけて隠蔽しとこう。

次は金貨について調べた。

まず金貨の重さが1つ40グラム。本物の金、つまりこの世界の金と同じ金属元素で且つ純金製なのだとすれば、今の大体の相場の1グラム4000円で換算したとして、なんと16万円にもなる。10枚で160万円だ。まあ、これはあくまでも超楽観的な試算だけれどもな。

もしもこの金貨を売るとして、そもそもこんな正体不明な品がオークで売れるのかという心配があった為、ネットオークションで「金貨」を検索。

……あ、ダメだコレ。

出品されているものは、当然といえば当然か、正規品（信用ある機関で発行された保証書付きの金貨のことね）ばかり。

中には胡散臭いものも出品されてはいるんだけど……。と、いろいろ見ていると添付画像に興味深いものを見つけた。

ゴールドテスター。

金の持つ運動エネルギーを電気化学的に演算してうんたらかんとかで、金の含有率を調べられる便利な機械なのだそうだ。こんな便利なものがあるとは、と検索をかけてみたら驚きの24万円。高けえ……。

しかし、これがあれば24カラット（純金）まで計測ができる。この金貨が何カラットかはわからないが、仮にこれで計測して24カラットなら、相当に美味い。とりあえず、機械を持ってそうな金買取センターにでも持ってってみよう。

次は精霊石。

無加工の宝石のような青い石だ。つーかラピスラズリの原石なんじゃねーのかなコレ。ブラック企業にいたころ数回扱ったことあるわ。

精霊石っていうからには、特別になにか効果があるのかどうかわからないけれど、ただのラピスラズリの原石だとしたら価値としては大したことない。サイズも小さいし。

そういえば、シェローさんの手にあった石は青くなかった。もし、お導きをクリアーするたびに宝石の原石がもらえて、もらえる石がランダムだった場合、「当たり」の石に当たったらすごいぞ。石のサイズはだいたい拳大けど、もしダイヤモンドでこのサイズの石だったら「億」もあるで……。

そんなでかいダイヤを売れるツテがあればの話だけだなー。

とはいえ精霊石は宝石なのか、それとも魔法の石なのか、ちょっと情報が足りないんでこれも一旦保留として、まずは金貨の価値を調べるために金貨1枚を握り締めて家を出た。

家の軽自動車に乗って隣町金買取センターに向かう。隣町にしたのは、売ろうとしている商品があまりに出所不明で怪しいからだ。まあ、とりあいずはまだ売る気はないんだけどな。一応の用心つてやつだよ。

金買取センターは、質屋然としており、表からは中の様子がわからない。こういう店のほうが出所不明な貴金属とか売りやすそうではあるな。駐車場に車を止めて、サッと入る。

窓口の店員に、金の買取を頼みたいと金貨を見せる。

たんとんと検品してから件のゴールドテスターを取り出す店員。

固唾を飲んで見守る俺。頼む！ 頼むぞー！ 24金来い！！

「お待たせしました。こちら24カラットのゴールド40.3グラムですね。本日の金の買取金額がグラム3821円ですから、査定額は多少色を付けさせていただいて、コチラになります」

154000の数字を出した電卓を提示する店員。

キターーーーー！ 24カラット！ 実はせいぜい18カラットくらいかな？ と思っただのに純金！ 純金ですぞー！！

……ついつい熱くなっちゃったが、さてどうする。売る気は正直なかったが、思いのほか良い金額が出ちゃったぜ。このまま売ってしまっても構わないが……。

……ま、いいか！

売っちゃおう！ そんで無駄使いしよう！

事務的に免許証の提示が求められた以外、なんの詮索もなく買い取りは終わった。今俺の手には154000円がある。ネットオクで1ヶ月がんばっても純利益でこの額が出るのは稀だ。

それが一日でなー……。

もうホントに異世界との交易で生活するしかねえ……。異世界怖いとかもう言ったらんねえ……。

その日はその後、ラーメン屋でトッピング全部乗せ大盛り味噌ラ

ーメンを食べて（なんと餃子も付けた）、スーパー銭湯でひとつ風呂浴びて、缶ビールを買って帰って晩酌して寝た。

いやあ、本当に贅沢って良いものですね！

え？ セコイ？

2年もニートしてるとこんなんでも大贅沢なんだよ！

第11話 異世界生活への始動の香り

次の日、朝5時に起きた俺は、昨日のうちに洗って乾かしておいた異世界服を身にまとい、向こうに持っていくものをバッグに詰め込んだ。

まずは、ナイフ。ボウイナイフはシェローさんにあげてしまったので、あとは中型か小型のナイフしか手元がない。昔、冗談で作ったククリナイフもあるが、あれはまだ未完成のまま放置してあるし……。

なので、中型のなんの変哲もないシースナイフを1本だけ持つことにした。

次に金貨を1枚だけこっちに残して、残りの8枚をバッグにIN。あとは、精霊石にギルドカード、デジカメ、救急キットにチリ紙、ハンカチ、タオル、お泊りセット（歯ブラシとか下着の替え）、非常食に、手持ちの宝石の中から数点。

まあ、こんなもんか。

お泊りセットを用意したのはアレだ。宿泊代がどれくらいになるけど、向こうの宿に泊まってみるつもりだからだ。

手持ちの宝石は、安いものからイミテーション（模造品）、ちょ

っと高いものまで、全部で20数点。ジュエリーケースに入れて持っていく。

この宝石は例のブラック企業で働いていたところに手に入れたものだ。ああ、そういえば俺がどんな職種の仕事をしていたかまだ話していなかったな。

ハローワークの楽しい求人募集に釣られて入ったその会社は、一口で言えば宝飾貿易業とでもいうもので、やってることはけっこう幅広く、宝石や絵画、毛皮やらの輸入輸出。絵画や宝石の営業販売、各種イベントの企画運営なんかが主な業務だった。

俺はそんな中、宝石の販売員として割り当てられたのだが、ノルマは月200万円、残業代なし、休日出勤手当なし、朝礼長い、飲み会の強要、怒号に叱咤、さらに社長の顔がクドい、などなどブラック丸出しなその体質にすぐに辟易してしまった。

ボーナスが現物支給でしかも、宝石か毛皮か美術品が好きなのから選んでいいぞ！ などと言われた時は、マジで辞めると誓ったもんだっけ……。やっぱボーナス年4回とかいう会社にホイホイ入っちゃダメってことだったんだな……。

まあ、でもあんな会社にも入ってたから宝石学者なんて天職があるんだろうとは思うけど……。もう、2度とあんなところでは働きたくないものだ……。俺が辞めてから暫くして脱税で摘発されたって噂だけど、どうなったのかなあ……。

それはさておき、異世界だ。さっさと出かけちゃおう！

そしてやってきました異世界。

これからエリシエの街に向かうわけだが、距離がけっこうしんどいんだよな。移動手段つーと、馬くらいしか思い浮かばないけど、馬なんて乗ったことないしなあ。自転車ってわけにもいかないだろうし……。

剣士だの詐欺師だのなんて天職じゃないから、騎手の天職でもあれば良かったのに。むしろこれから増えないかしら天職。神官ちゃんにそういうこともあるか聞いてみるかな。

なんてことをウダウダ考えつつも、シェローさんと出くわさないように気を配り歩き、エリシエに到着した。

鏡の屋敷から歩いたり小走りしたりして、およそ1時間半。歩く速度がだいたい時速6kmだとして9kmくらいか？ 実際はもう少し短いだろうが、なんにせよ5km以上か。なんらかの移動手段を確保したいものだな。

エリシエの街は、昨日と同じように活気に満ちていた。

俺は一直線に神殿に向かった。目指すは神官ちゃん！ エルフの神官ちゃんですぞ！（そういえば名前聞いてなかったな）



「今日は神官様はお休みだよ」

デジカメ握りしめて勢い勇んで神殿に飛び込んだ俺に無慈悲な言葉を投げ捨てるカボッチャさん（仮名 推定58歳人間女。髪型がカボチャぽい）。

「では、神官さまをお願いします」

「だから今日は神官様はアレの日だからお休みなんだよ。また明日来るんだね」

ガーンだな。出鼻をくじかれた。

……………つか、今アレの日って言った？ あのおバサン、アレの日って言ったよね。アレの日ってつまりアレの日ってことなのかな。エルフでも月に1回あるのかな。いや、まてよ……、エルフはあんまり性的欲求が強い種族と聞くから……、その反動で半年とか1年に1回、その……強烈な発情期的なものが来るって昔なんかのノベルで読んだ！ それだ！ このフラグ逃せない！

「……………どうしても火急の用事でしてね……。取り次ぐことはできませんかね？」

「そう言われてもねえ。アレの日のエルフ族がどこに行ってるかなんて、よほど近い人間じゃないと知らないと思うよ。当然ここにはいないし」

よし！ 探そう！ 年に1度の発情期で苦しんでいる神官ちゃんを助けられるのは俺しかない！ フラグ回収するしかない！！

……しかし、考えてみるまでもなく探す手立てはなかった。なんの取っ掛かりもないのに、ほぼ完全に他人のエルフちゃんを探すつてのは無理がある。さてどうすっかと思ったが、ふと、例のスキルのどれかが使えるのではないかと思い当たった。

ダメ元でやってみるか！

天職板を出す。

異界の賢者のところにあるスキル「異世界旅行」「世界の理」そして「真実の鏡」。

真実の鏡は使えば即クエストクリアになるから、これはどちらにせよ早めに使おうと思っていたが。

さーて、ところでこのスキルってどうやって使うの？ 試しに板を指でクリックしてみたが抵抗なくすり抜けちゃうばかり。

やっぱ天職板出すのと同じようにやるのかな。

まず、異世界旅行を試してみる。試すといってもなんだか全然意味が解らん。「異世界旅行異世界旅行異世界旅行……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

さ、次々。「世界の理世界の理世界の理……」と念じるのみよ。

……はい。なにもおこりません。

大丈夫かこれ。なんか前提からして間違ってるのかな。説明書が欲しいにゃー。

気をとりなおして、次。「真実の鏡真実の鏡真実の鏡……」とダメ元で念じてみた。

念じてすぐに、天職板の内容が一瞬で切り替わった。ページをめくるように。

切り替わった天職板にはこう刻まれていた。

【種別】
？

【名称】

？

【解説】

？

【魔術特性】

なし

【精霊加護】

なし

【所有者】

ジロー・アヤセ

「なんぞこれ……」

などとボンヤリングしてる暇もなく輝きだす俺。

ああそうだ、真実の鏡使ったからクエストクリアなんだな。

ポンッ

とまた、天職板が可愛い手乗りサイズの妖精になる。

「よおよお！　なんだよその謎の機械はよ。鑑定するのはいいけど

もうちょっとワタシ好みの奴にしてくれよな。あ、コレお祝いの品な。今回は簡単だったからショボイやつだぜ。売ってもいいぞ。じやあな。また世のため精霊様のためにガンバツてくれよ」

ポンッ

そしてまた手に石が乗っている。相変わらず言うことだけバツと言って帰るやつだなあ。

順を追って考えると。

まず真実の鏡は、どうやら鑑定スキルのようだ。妖精がそういつていたし、そもそも妖精が鑑定をしてくれているようだし。

今回鑑定したのは、俺が手に持っていたデジカメだろう。あの妖精が鑑定しているみたいだから、異世界のハイテク機器のデジカメは鑑定しきらなかつたんだろうな。

しかし、これは妖精の性能によるが、ものすごく有用なスキルだ。異世界の商品を扱うともなれば無二のものだと言ってもいい。これからどんどん使っていこう。グフフ。

精霊石はコブシ大の透明でシャープな両剣結晶体だった。

「水晶クォーツだなこれは。ハズレか。せめて色付きならよかったがなあ…

…」

「ちょ、ちよつとあなた！ それお導き？ 今達成したの？」

突然興奮して食いついてくるカボッチャさん（仮名）。まあ、確かに外から見ればなんかボンヤリしてるな、と思ったらクエストクリアしてた、みたいな状態だろうからな。

「あ、はいそうですけど、なにか？」

「なにがもらえたんだい？」

「えっと、コレですね」

そう言って、水晶を見せる。

「ほー。いいのに当たったね。これ、真実の鏡だよ」

「真実の鏡ですか？」

「占いで使うからね。そう呼ばれてるんだよ、この石は」

……なるほどね、精霊さんもエスプリが利いてらあ。



水晶はタオルに包んでバッグにしまい、神殿を出た。

結局のところ神官ちゃんを探す方法はなさそうなので、神官探しはスルツと諦めた。

人間諦めが肝心だよな。気持ちの切り替えの速さで仕事に差が出るってばっちゃんも言ってた。

さて、神官ちゃんがいなくなると、あと事情を知っててアテになりそうなのは商工会議所のトビー氏か武器屋のオヤジだが……。

トビー氏には俺レベッカさんの甥ってことにしてあるんだよなあ。嘘だと思破られてそうではあるんだが……。

でも、ま、トビー氏にはそれ以外にも聞きたいこともあるし、商工会議所に行ってみよう。

商工会議所に辿り着いて今更ながら気付いたが、もうギルドカード持ってるんだし、無理にトビー氏に取り次いでもらわなくても一般職員（できれば女性希望）でも全く問題ないんだよな。

よかった、あんな眼光鋭い男とマンツートか無駄に寿命縮めるわ。

というわけで受付でギルドカードを出して、これから商売を始めるにあたっての相談に乗ってもらいたい云々を伝える。

そういうことでしたら、と受付嬢（セミロングの気の良いオカチメンコといったところか。推定年齢26歳）がそのまま相談に乗ってくれるそうだ。商談席のようなところに案内され、そこで話をする事になった。

「……というわけで、この街に来る途中で暴漢に襲われましてね、

ちょっと記憶が飛んでる部分があって、いろいろ曖昧になってるんですよ。なので、基本的なところも聞かもしれませんがよろしくお願いします」

「まあ……、大変でしたのね。私にわかることでしたらなんでも答えさせていただきますわ」

この記憶喪失設定を話すのも、もう手馴れたものだ。つか流れるように嘘が出てくるのは、俺の素養ではなくあくまで詐欺師の天職のせいだと思いたいね。本当の俺は素直な良い子です。

「まず、この街か郊外で家を持ちたい場合はどこに問い合わせれば良いのでしょうか？ この街で商売をやるのは良いのですが、やはり拠点がないと、いつまでも宿暮らしというわけにはいきませんか？ でね」

「家ですか。街でならば、ギルド所有のものもありますし、個人所有のもので店子<たなこ>を募集しているものもございます。郊外では土地所有権が曖昧な土地が多いですから、建てた者勝ちなところがあるというのが実情ですわ。それと郊外でも、村に住むのはあまりお奨めできません。村のルールに縛られてしまいますし、はっきりと言いますと商人にとっては足枷になりますから」

「なるほど……。たとえば、村からは離れている、誰も住んでいない屋敷なんかの場合はどうなりますか？」

「それは廃屋ということでしょうか？ 場所によりますが、廃屋になって長そうならば、そこに住んでしまっても構わないと思いますよ。修繕にはそれなりかかるとは思います……。すでに目星を付けた屋敷が？」

「ええ、まあ。……えっと、では僕がそこに住むと決めた場合、そこが僕の家だということを保証する書類のようなものをギルドで発行してくれたりなんかはしてもらえないでしょうか。廃屋とはいええ勝手にすむというと不安ですし、なにより高いお金を掛けて修繕してから、ここは俺の家だから帰せということになっても困りますし」

と言うと、さすがにそれだとわからないからと、上司のところに聞きに言ってしまった。ハッキリ言っただの屋敷が一番の懸案なのだ。あの家をまず自分の家にしてしまわないと、枕を高くして眠れない感じがある。

こう見えても俺ってば、アットホームな異世界生活夢見ちゃってんだよね。俺がいて……、エルフがいて……、暖炉なんか灯しちゃって、シチューなんか食べちゃって……。ベッドはクイーンサイズを買おう……。

だから大事。家大事。

でも書類ってのはあまりに現代的な考え方だったかな？　フアンタジー世界なんだからテキストでもよかったのかもな。

受付嬢が向かった方向を見ると……、わぁお、上司はトビー氏だわ。それでトビー氏連れてきちゃったよ。俺だと確認して微妙にしかめっ面だよトビー氏。

挨拶もそこそこに席について、おもむろに地図を広げるトビー氏。

「話はだいたい聞いたよジロー君。で、その屋敷とやらはどこにあるんだい？」

地図はエリシェ近郊の地図らしく、南の海に面したエリシェの街と、北と西に続く街道なんかが描かれている。

「えっと、この地図だとシェローさんの家は……、ここですか？
とすると村がここで、街道がこうだとすると……、このへんですね」

「うむ……？ そんなところに廃屋敷などあったかな……？ ミサキちゃん、ちょっとオルセルを呼んで来てくれ。やつはヤーツト村出身だ」

はいと返事をして席を外す受付嬢。どうやらミサキさんと言うらしい。ずいぶん日本的な名前だな。

オルセルさん（推定年齢32歳のオジサンオニイサン。人良さげ）はすぐに来た。

「オルセル。ここに何年も放置された屋敷があつてな、この青年がそこに住みたいそうなんだが、こんな場所に屋敷などあったか？」

トビー氏が聞くと、しげしげと地図を眺めるオルセル氏。

「んん？ ここですか？ ……冗談よしてくださいや。そんな場所にやなんにもありませんよ。ガキのころよくそらで遊んだもんですがね。廃屋なんかあったら格好のガキの遊び場になってますよ。それに村からも目と鼻の先じゃあないですか。よほど最近建てた屋敷ならば、俺が知らないってこともあるかもしれませんがね」

「……だ、そうだ。ジロー君。そもそもこの辺は森が近いからな。郊外に住む者はシェローのような物好きを除いては、ほとんどいない。」

「だとすると僕が見たあの屋敷は？」

「なにかを見間違えたかしたんじゃないのか？ まあ、もしもそこに本当に屋敷があった場合は……そうだな……、住んでしまっても構わないよ。証明書を発行してもいい。どうせ君にしか見えない屋敷なんだからね」

と言って笑顔になるトビー氏。

これ絶対馬鹿にしてるよね。ミサキさんもオルセル氏も苦い表情してるし。

クソッ、どうしてこうなった。

でもまあ、冷静に考えれば、証明書も発行してもらえるし、あの屋敷の存在もいまいち誰にも知られていないようだ。

結果だけを見れば最高じゃん。気にしたら負けかなと思っている。

「ありがとうございます、トバイアスさん。では、その証明書はいただいておりますよ。今度ぜひ遊びにきてください」

「ああ、そうさせてもらおうよ。証明書はすぐにできる。ちょっと待っていてくれるかい？」

お互いにニヤリとし合う俺とトビー氏。茶番だわあ。

トビー氏とオルセル氏が持ち場に戻っていき、また受付嬢と2人になる。

とりあえず家の件は、これでよしとして、まだ聞かなきゃならな
いことが沢山あるのだった。

店の持ち方。店のだいたいの値段。お奨めの宿。宿の値段。買取所のこと、この街のこと、それにこの世界のこと……。

でも、それはさておいて。

「護衛を雇いたいと思っているのですが、どこで雇えますかね？」

「護衛ですか？ ハンターギルドなどで冒険者を護衛として雇うこともできますが割高ですわよ？」

「やはりそうですよねえ。普通、商人の方はどうしてるんでしょうか。冒険者を雇うのが一般的なんですか？」

「普通は奴隷が多いんじゃないでしょうか。商隊を組むような場合は護衛を雇う場合も多いですけど」

「奴隷……ですか。しかしイザというときに奴隷が命を掛けて働きますかね？」

「奴隷の契約は、正式な精霊契約ですから大丈夫ですわよ」

「精霊契約？」

「精霊との間に交わした契約ですわ。これを反故すれば、即ち精霊の祝福を失うことを意味しますから。まして、護衛奴隷は他国で戦士をしていた者が多いのですよ。彼らは敵に背を向けて逃げ出したりはしませんわ」

なるほど。案外良いものようだぞ奴隷。
買ってみてもいいかもしれないぞ奴隷。

そう思ったらだんだんその気になってきたぞ奴隷。

でも一生面倒見るとか無理くさくね奴隷。

だいたい値段どれくらいするんだ奴隷。

出来れば女の子がいいな奴隷。

もっと言うと若い子じゃなきゃな奴隷。

正直に言うところエルフだったら最高だ奴隷。

「奴隷っていくらくらいするんスか？」

あ、喋りが雑になってしまった。スか？　　じゃないよ、スか？
じゃ。

「私はあまり詳しくありませんが、ピンキリだと聞いております。
安くとも金貨10枚程度はするはずですが……」

「なるほど……」

安っす。

どんな人だったとしても金貨10枚で、多く見積もって150万
円じゃん。

人生安っす。

さてはて、詳しく知るためには実際に奴隷を売ってるところに行
ってリサーチするしかなからう。

奴隸商とか俺の人生はじまって最大の冒険になるで……。

第11話 異世界生活への始動の香り（後書き）

全国1000万の奴隷ファンの方おまたせしました。ようやく次回奴隷のタインのようです。

第12話

エルフ奴隷は金額的に無理な香り

俺がああ屋敷（鏡の屋敷ね）の正式な住人であるという証明書は、かなりガチな感じにトビー氏が作成してくれ、ニヤニヤしながら渡してきた。

羊皮紙に異世界言語でなんらか書いてある書類である。当然読めないのだが、まああの男のことだ仕様に問題があったりはしないだろう。

ちゃんと慇懃な感じに「お手数かけましてありがとうございます」と言っておいた。「いえいえこれもギルドの仕事ですから」と笑顔でトビー氏も応対していたし、何の問題もないぜ。

……いずれガチで屋敷に招待してやろう。どんな顔するのか見物だな。

その後、その他の聞いたかったことを一通りミサキさんに聞いてから、俺は商工会議所を後にした。次の目的地は、奴隷商館である。

もちろん奴隷を買い取るほどの金はないんだが、奴隷商行って、どんなもんだかりサーチしなければならんだ。……が、実際には腰が引けるなあ。どういう風に売ってるものかもわからないし、現代日本人にとって奴隷とか……、なんつーか真っ直ぐ向き合える気がしないっつーか……。

でもこっちで活動するなら、護衛、できれば、こっちの世界のことを教えてくれるアドバイザーにもなってくれる人が必要なんだよ

な。文字も読めないし……。

奴隷商館の場所はミサキさんから聞いていたので迷わず辿り着いたんだが……が……。これは入りにくいわあ……。

商館は白壁の窓のない2階建てのきれいな建物で、入り口は閉ざされ、看板らしきものはあるものの中の様子は伺えないという、ひっじょーに入りにくいものだった。

非常に入りにくいって言うか……、これに1人で入るの？ 1人で廻る寿司屋にすら入れない俺が？ 「1人焼肉」以上に高難易度なんですけど。

それに、どう見ても会員制っつーか、一見さんお断りって感じのオーラが剥き出されちゃってるし……。上級者向けすぎる……。

でもなあ……。

異世界で商売するなら、乗り越えなければならぬハードルなんだよねこれ。貿易とは戦争なのだよ！

でもしかし、素直に扉を開けて入っていく勇氣はどうしても出なかったので、誰かが出てきたらお見送りに店のもんが出てくるだろうから、それを捕まえる作戦を採ることにした。さすが俺小賢しい。

店の前を不審者よろしくうろつく俺。

入ろう！ と決めた勇氣が時間をおくごとに萎えていくのを感じながら、しかしそのときが来たら飛び出して、ああ言うてこう言うて……とシミュレーションしていた。

15分もうろついたらころだろうか、はたしてついに店の扉が開い

た。



扉から出てきたのは、20代中程くらいかの銀髪が印象的な貴族風の男だった。店員の見送りもなく普通に店から出て歩いてくる。丁度俺がいる方向に。

店員の見送りが無いとはアテが外れてしまったな。次を待つという手もあるけれど、奴隷商館なんて、そんなに客が多いわけでもないだろうしな。それともこのお兄ちゃんに話かけてみるかな。

それに、ひよつとするとこの人が店員の可能性もあるしな。

俺は思い切って話しかけてみることにした。いずれにせよ、奴隷のことが少しでも聞ければいいのだし、あの店に入るよりはハードルが低かろう。

「あの……、ちょっとお時間よろしいでしょうか？」

「はい？　どうかなさいましたか？」

にこやかに返事をしてくれる貴族風の男。お供もなしで単独で歩いているし、貴族風の一般人なのかな。でも顔付きというか、オー

ラというか、正直あんまり一般人ぽくないけどもな。

「いえ、今そちらの商館から出てくるのが見えたものですから、ちよつと教えていただけたらな、と思ひまして……。あ、僕はジロー・アヤセという者で、商人をやっております」

「商館に御用で？　今は営業中のはずですから行ってみては？」

「いや、実は、恥ずかしい話なのですが、僕は奴隷を買ったことがなくてですね、あの門構えに怯んでしまひまして……。ですから、よかったら少しいいので奴隷について教えていただけたらな……と」

「そういうことでしたか」

一応納得したらしい貴族風の男。どうやら店員ではなかったようだ。勢いに近い形でこの人に声を掛けちゃったが、やっぱ素直に店に行つとけばよかったかなあ。でもまあ今更だな。

「それでどういったことが聞きたいのです？」

「護衛のための者が欲しいのですが、相場としてはどれくらいなのか。種族や性別でどの程度変わるのかなんかも教えていただけたら……」

「相場という話ですが、まず、奴隷に相場というものはありません。種族、年齢、性別、容姿に経歴、天職によって大きく変わりますから。あなたがどのラインの人員を求めているかによりますが、奴隷として最低の部類『人間の60歳の男性、醜男の元山賊の下っ端で

天職なし』という条件ならば金貨1枚でも買えますよ」

淀みねえなこの人。詳しいし。スラスラ教えてくれるし。この人に聞いたのは正解だったようだな。もっといろいろ聞いておこう、そうしよう。

——そして調子に乗ってしまった。

「希望を言うなら、エルフの若い女性で剣と魔法が使える子が欲しいんです」

「……正気か貴様」

あつれー？



「なにかおかしかったでしょうか。……すみません。実は僕、記憶を一部失ってしまいましたね。なにか気に障ったのであれば謝ります」

「ああ、そういうわけでしたか……。いえ、エルフの奴隷が欲しいとはなかなか度胸がおありになるな、と思ひましてね」

貴族風の男氏によると、エルフの女性というのは奴隷の中でも最上位に君臨するものらしく、買えるのは王侯貴族か大商人くらいのもものらしい。当然値段は天文学的な数字。
しかも予約制。

そうでなくとも、奴隷になるエルフ自体が少ない。

普通は、莫大な「借金」をしたか「犯罪」を犯したか「敗戦国」から連れてこられたのどれかで奴隷に身をやつすらしいのだが、借金で奴隷になったり、犯罪で奴隷になったりするエルフはほぼいない為、自ずと敗戦国奴隷のみとなるそうだ。

しかし今は戦争は膠着状態。当然新規の敗戦国奴隷は入ってこない。だからエルフの奴隷は余計に少ないという寸法。

次に、エルフは他の種族と比べても寿命が長い。

いや、大事なところは見た目の若い期間が長いところなのだ。性的な意味で。貴族なんて自分の息子に引き継いだりするらしいんだよ。性的な意味で。もうやだこの国。

次に、エルフは精霊魔法が使える。

精霊と共にあるこの国では、精霊魔法を使えるものが近くにいてるのは、特別な意味があることなのだそうだ。精霊魔法は精霊と感応して起こす奇跡なんだってさ。これは魔術師の使う魔術とは全く別の概念なんだそうで……。

最後に、エルフを奴隷にするってが、すごいステータスなんだとか。

民草にはちよつと嫌われるらしいけどね。エルフ尊敬されてるから。でも値段とか凄いいし、商人でエルフの奴隷持つてるといって一流の証明になるんだと。

———というわけで、俺みたいな若いペーパーが気楽に「エルフの奴隷」とか言っているもんじゃなかったらしい。

……だが……

「そうだったんですか……。でも買えることは買えるんですね。その商館でも予約ってできるんでしょうか」

「今の話を聞いていて、それでも買う気なんですか？ 正気を疑いますよ……。それとも、大商人の息子かなにかなんですか？」

「いえ、純粹たる一個人ですけども。でも夢が金で買えるなら、目指してみたいですね。……それに、僕はいずれにせよ大商人になりますから。エルフを買うのが先になるか後になるかの違いだけです。ま、今はしがない駆け出しですが」

「……………夢、ですか」

難しい顔をして沈黙する貴族風の男。

そうさ、夢さ。叶うはずのなかった夢さ。地球に3億人くらいいるはずのエルフファン全員の夢さ。

それにエルフちゃんも俺のところに来たほうが幸せに決まっているね。なぜならおそらく俺が世界で一番エルフを愛しているからだ！
たとえばそれが俺の独りよがりであったとしてもだ！

沈黙していた貴族風の男が俺に向き直って言った。

「では1つ勝負をしましょうか」

「勝負ですか？」

「勝負です。あなたが勝ったらエルフをお譲りしましょう」

「ハア……、て、え？ マジで？」

いきなりよくわからない話の流れに。

つい素でマジで？ とか言ってしまう俺です。

第13話 異世界勝負は無謀な香り

「自己紹介がまだでしたね。私は御用商ソロ家のエフタ・ソロと申します。第1自由都市マリシェーラの者ですが、今日はエリシェに奴隷の納品をしに来ましてね。丁度これから奴隷をこちらに運ぶところだったんですよ」

御用商……ってことは、国のお抱えの商人さまってこと？ やっべ、超大物なんじゃね。

奴隷商館の店員かも！？ なんて思った自分をぶん殴ってやりたい……ってほどでもないか！ エルフ扱ってるなら結果オーライだ！

「はい。それでは、今日こちらにエルフのフリーの奴隷を連れて来てるってことなんですか？」

「いえ……、先ほども申しましたが、エルフの奴隷は予約制ですね。私のところだけでも8名待ちという状況ですから……。今の国の情勢で正規に予約待ちをするなら、最低でも5年は待つことになるでしょうね」

8名待ちが多いのか少ないのか判断付きかねるけども。値段すごい高いみたいだし、ボチボチ多いってことなんだろうな。厳密にはいくらくらいするんだろうな。

しかし、5年待ちとか凄いな。どんだけ人気なんだよエルフ。俺が世界一エルフ愛してるとか、撤回しなきゃならないかもしれないほどのエルフ人気だよコレ。

「そんな状況であるのに、勝負？　に勝てば僕にエルフを譲ってくださるんですか？　勝負の内容にもよりますけど、あ、でもお金はすぐには用意できませんよ」

「いえ、あなたが買った場合お金は結構です。そのかわり、あなたが負けた時はそれ相応のペナルティを負っていただくということですね――どうですか？」

「どうですか？　たった内容がわからなきゃどうしようもないんですけお……」

「だいたいこういう『うまい話』ってのは、必ず酷い結末になるものだよね。教訓だらけの世界で育った日本人を甘くみなさんなよ！　ブラック企業じゃむしろ『うまい話』で騙す側だったんだよ！」

でもいちおう話は聞いちゃう！　という勝負かわからないけれど、どっかに抜け道があるだろうからな。ひょっとするとブッコ抜けるかもしれんし。

「ではまず勝負の内容を教えてください。あまりにも勝機のないものなら、さすがに夢が掛かっていても乗るわけにはいきませんから」

「勝負内容は、簡単に言えば贈り物対決です。相手はエリシェの市長。贈り物を相手に気に入られたらあなたの勝ち。それ以外なら私の勝ち。簡単でしょう？」

簡単でしょう？　じゃないよ。賄賂^{ワイロ}じゃねーか。

しかも贈るの俺だけってことは、賄賂でアレされたら俺だけナニされるってことじゃねーのコレ。さりげなく酷い提案だな。

「なるほど……。それは僕、ジロー・アヤセ個人として市長に贈り物をすればよいのでしょうか？」

「そうなりますね。私が市長に渡りを付けますからご安心ください」

「……つまり、エフタさんに紹介された僕が市長に贈り物をして、市長がそれを気に入れば僕の勝ちだと。そういう勝負ということでしょうか」

「そうなりますね」

ソロ家とエリシエとの関係がイマイチよくわからないが、贈り物作戦がうまく行くならエルフくれてやっても良いくらいの旨みがあるということなんだろうな。

一応俺の名義で贈り物をするけど、うまくいったら旨みはエフタ氏が総取りする……。と。

そういう話だなコレは。汚いさすが御用商汚い。

しかし、下手こいて変なもの渡せばアレされる可能性のほうが高い……。もしくは市長が高潔な人物で賄賂が効かないとかか。

そうでなければ、見ず知らずの俺みたいなのに、こんな話を持ちかけたりはしないだろうしな。

エルフが欲しいなんていう世間知らずをダメ元で使ってみようという話なのか……。

そもそも、この国における贈賄の罪の重さってどんなもんなんだろうか。一発死刑とかだとしたら、いくらなんでもギャンブル過ぎるなあ。

つまり、この勝負に勝つためには、まず市長について調べあげて、市長になんらかの商売上の便宜を図ってもらえるくらいの贈り物ワイロをする必要があるってわけだ。

そして失敗したら、あくまで俺が勝手にやったこととして、エフタ氏は俺を見捨てる。トカゲの尻尾切りっていうのかな、この場合も。

うーむ……。どうなんだコレ。

「……僕が負けた場合のペナルティを教えてください」

「あなたが負けた場合は……、そうですね。精霊石を10個いただきますしうか。手持ちがなければ、これからあなたがお導きを達成するものを予約するという形でもかまいませんよ」

……精霊石10個ねえ。まだ精霊石の価値を調べてないけれど、昨日今日でもう2つもあるし、精霊石10個とエルフとじゃ釣り合い取れてなさ過ぎる。

てことは、これは形だけのペナルティってことなんかな。失敗したら贈賄でアレでナニしちゃうんだろうから……。

それともそもそもがダメ元のお試しなんだろうから、エフタ氏的には精霊石の10個も取れば元出なしで小遣い稼ぎくらいにはなるって考えなんだろうか。精霊石なら取りっぱぐれのない債権としちゃ、優秀なんだろうしな。

それともなんらかの当て馬的なものとして利用とか……。

……考え出せばキリがないか。

「どうです？ 勝負しますか？」

「その前に確認をさせてください。まず、エルフは予約制で手元にいないんじゃないんでしたっけ？」

「いえ、ついこの間ひょんなことから手に入ったエルフがおりましてね。予約の方々とは少々条件が折り合わないの、まだ手元にあるですよ。まだ若い美しいエルフの少女ですし。その点はご心配なく」

ふむう。いることはいるらしい。

どうするかもっと詳しく聞か。でも嘘並べられる可能性もあるし、現物を見ないことにはどちらにせよ信用しきれないし……。

でも「若い美しいエルフの少女」って聞くだけで、命を賭したギャンブルでもやってみたくなるから男ってのは愚かだわあ。相手の思う壺だよ！



そして俺は命を賭けた勝負をすることにした。

いろんな材料を天秤に掛けて、おそらく上手くやれると判断した

からだ。

でももし上手くやれなかったら、なんとか屋敷まで逃げて、ほとぼり冷めるまで異世界は禁止か、泣く泣く鏡自体を売るしかなくなるかもしれないが……。

それでもエルフ少女がかかっている以上、やるしかねえんだぜ。悪い奴隷商に捕まったエルフ少女を助け出す俺と違ってこの上ない胸熱シチュだよ。これは惚れざるを得ない。

贈り物はエリシエ設立50周年のパーティで……とのこと。ハッキリ言ってハードル高いんだけど、ブラック企業のころパーティでの売り込みとかわりとやらされてた俺に死角はなかった。職歴って偉大だなあ。

エリシエ設立50周年パーティは、「エリシエ設立50周年祭」の2日目の昼過ぎから開催されるそう。俺はそのときにエフタ氏に紹介されて市長に贈り物をする。そういう段取りである。

実行日の50周年祭まで、あと15日ほどあるのでその間に準備をしなければならぬ。ハッキリ言っておあんまり時間ないんだけど、俺ががんばるよエルフちゃん！

勝負の内容が口約束だけなのが気になったんだが、当日にエフタ氏のお抱えのエルフによって正式に精霊契約を結ぶんだとか。「逃げてもいいんですよ？」などと挑戦的なエフタ氏だったが、準備しきらなかつたら考えさせてもらおう。

最後にさりげなく「どうして市長に贈り物をするの？」と聞いてみたら「50周年のお祝いですよ」とシレッと答えたエフタ氏。じゃあなんでお前は贈らないんだよ。バカなの？ 死ぬの？



15日後に中央広場の前で待ち合わせる約束をしてエフタ氏と別れた。

さて、これからこの勝負に勝利するために打てる手をすべて打たねばならない。まずは市長についての情報収集。贈賄の罪の有無。50周年祭について。

細かいことを言えば、もっといろいろ調べることはあるが、到底1人では無理なので誰かに協力して貰う必要があるな……。

いろいろ考えたが、結局、シエローさんとレベッカさんに頭を下げて手伝ってもらうことにした。あのとき、逃げ出してしまったことも謝っちゃって、協力してもらおう。

これから鏡の屋敷に住むなら、ご近所さんになるのだしな。

第14話 精霊石は魔法の香り

「だいたいの経緯はわかったけれど、どうしてそれを受けたのジロー？　いくらなんでも怪しすぎない？　だいたいソロ家といったら、本当に帝都でも有数の大商家なのよ？　その人がお供も連れずにウロウロしたりするのかしら？　それにどうしていきなりジローにそんな勝負を申し込むのかしら。簡単な賭け事程度ならともかく、市長よ？　エリシェで一番偉い人なのよ？　いくらなんでもおかしいわよ」

ガーっと言うレベッカさん。

冷静に考えれば確かにそうだ。つか冷静に考えなくても変だ。

……………なんで俺はホイホイと話を信じきって勝負なんてするのにしたんだろう。商品とでもいふべきエルフも見てすらもない。相手の身元も確認していない。

すべて自称ソロ家のエフタ氏の証言のみの話だ。

それともエルフ熱が高まりすぎていたのかな。恋は盲目ともいうけれど……。いやそれは関係ないか。

なぜかなんとかなるから勝負しなきゃって思ったんだよね……。

「それにねジロー。精霊石10個がたいしたことないなんてことはないのよ。人が一生のうちに得られる精霊石は普通20個前後。よほど精霊に愛された人でも30個程度なんだからね？」

うーん。2日で精霊石が2個も手に入っているから、一ヶ月に少なくとも5回くらいはお導きを達成して精霊石ゲットできるものか
と思い込んでいたけれど……。

一生に20個でことは、10歳で祝福を受けたとして……、こっ
ちの人の平均寿命はわからんが60歳くらいだとしても、50年で
20個だから……2、5年に1個か。10個だと、ハハハ、25年
分だわ。

だからシェローさんもカボツチャさん（仮名）も俺がお導き達成
したとき興奮気味だったんだな……。

「精霊石の値段は、たぶんジローが想像しているのより、ずっと高
いのよー？ 安いものでも金貨20枚はするんだから」

え、マジか。

超TAKEEEEEE!

日本の金買取センターで1枚15万で金貨が売れたことを考える
と、300万円……。車買えるじゃん。

お導きクリアするだけで、そんなボーナスが得られるなんて異世
界人はお得だと言わざるを得ない。

まあ、向こうでの金の価値とこっちの金の価値と比べてアレして
も意味ないんだけどな。でもなあ、しかしなあ……。

「どうして精霊石が高いのかわかる？ 精霊石はそれ自体が精霊力
の塊なの。そして、その力をエルフが精霊魔法で一旦還元すること
によって、石の種類によってだけど、いろいろな奇跡が起こせるの
よ。使い道として一番人気があるのは『若返り』かしら。エリシェ

でも神官さまが精霊石の還元魔法の施術を請け負って下さっているのよ？」

若返りて……。

そんなスペシャルパワーがあったなんて……。

「これラピスラズリの原石や。たいしたことないわあ」　じゃないよ全く。300万でも安いわ。

「もし仮にそのエフタって人が本物で、本当に市長に贈り物をしなきゃいけないとしても、それはそれで大変だよ？　市長は、ミルクパールさんっていうんだけど、賄賂は受け取らない清廉な人物として有名だしね」

「別に賄賂ということではないのかもしれませんが。贈り物を贈って気に入られれば勝ちということですよ」

「場所が他の場所ならねー」

あ、そうか。

パーティ会場なんていう、公衆の面前で商人からの贈り物を受け取ってもらって、さらに気に入るなんていう露骨な意思表示をさせなきゃいけないってわけか。

うわあ、なんで迂闊に受けたんだろこの話。マジで逃げようかな。

「あ、あとジローはやけに心配してるみたいだけど、物を贈って罪に問われるってことはないわ。だから、この話、本当に受けるなら精霊石10個渡すのは覚悟の上でチャレンジしてみるしかないわねー」

「贈賄 即 タイーホ」がないってのだけが救いってわけなんだなあ。



話はちよつとさかのぼる。

俺はエフタ氏と別れてから、街で適当なお詫びの品を買ってシェローさんの家に向かった。

お詫びの品は酒にしてみた。

こっちの世界ってけっこう酒の種類多くて、ワインやビールだけじゃなくてウイスキーやリキュールみたいなものも売っている。当然それはガラスのビンに入っているので、ガラスの生成技術もあるようだ。

家とか石作りが多くて雑なくせに案外技術力あるんだよね……。それともただの食道楽文明なのかな。料理もおいしいし。

買ったのはウイスキーのような琥珀色の酒で、値段は85エルもした。ビールやワインのような樽売りのものは安いようだが、ビン

に入っただけは高級品という位置付けのようだ。

最初、イノシシ料理の件があったので向こうに戻って味噌でも買ってこようかとも思ったけれど、出所の説明をしきる自信がなかったのでやめておいた。

2時間近くかかってシェローさんの家に辿り着く。

うっかり昼時に着いてしまい2人とも食事中だったが、昨日俺が逃げるように立ち去った件についてはまるで気にした感じでもなく歓待してくれた。

そしてまた飯をご馳走になっている。

ヤキメシ
焼飯だ。

2人ともどう見ても西洋人な見た目なのに、食べてるもんは土曜日の昼にかーちゃんが作ってくれるような焼飯^{ヤキメシ}。さすがに醤油味ではないけどな……。しかし、親近感沸くなあ。

食べ終わり、茶を飲んで一服してから、昨日の件を詫びだとして酒を出した。レベッカさんは「若いのに気を使いすぎよ」と言っていたが、シェローさんは有頂天だった。そして早速開けようとしてレベッカさんに叩^{たた}かれている。

ああ……。俺の中でだんだんシェローさんがおバカキャラになっていく……。

それから今日のエフタ氏とのことを話し、手当ては支払うので協力して欲しいと持ちかけた。

シェローさんは、「でっかい夢だなー」と能天気な酒瓶をさすり

ながら聞いていたが、レベッカさんはキョトンとした表情でいる。
どっか理解できない要素ありましたっけ？

「だいたいの経緯はわかったけれど、どうしてそれを受けたのジロ
ー？」

そして冒頭の話の流れになったのだった。



シェローさんは狩りの仕事があるということで、レベッカさんだけが手伝ってくれることになった。

本人曰く「危なっかしくて見てなんない」ということらしい。反論できるだけの材料もないので、素直に厚意を受け取っておく。これもまた「お導き」かな？　とも思ったが、もうそんなこと気にするほどのネンネちゃんでもないぜ。なんせ300万だしな。

そして2人で街に向かったんだが、レベッカさんが「馬で行こうかー？」と言い、ドキドキ恥ずかしのタンデムで行くことに。

「じゃあ乗って。馬は乗ったことは？」

颯爽と厩舎から馬に乗ってあらわれるレベッカさん。か……かっこいい。

やはり元傭兵。昔は馬に乗って戦ったりしてたのかな、乗馬のこととはよくわからないが、手馴れた様子で俺の横に馬を寄せる姿に一切の淀みがない。

やっぱ騎手の天職欲しくなるな……。天職なくても普通に練習すれば、これくらいできるようになるんだろうか。あと、馬も欲しい。

「……………えっと、どこに乗ればいいんでしょうか？ 鞍、1人乗り用ですよね、それ」

「この鞍おっきいから詰めれば女子供2人ぐらいなら大丈夫よー？ はい、どうぞ」

そういつて、前に詰めてくれるレベッカさん。マジか。つか俺子供か。つかレベッカさん俺より体格いいんだよね……。

変にまごついていてもおかしいので、引っ張り上げてもらって乗った。

……人妻の腰に抱きついたりするのはセーフなのかな。シェローさんも「気をつけてなー」と意に介していない様子。ま、いいか！ いいならいいか！

レベッカさんの背中あったかいナリィ……。

出発して暫くしてからレベッカさんが言った。

「昨日は、どうして急に行っちゃったの？　せつかくお導きの達成のお祝いしようと思ったのに」

「あ、いえ、すみません。……ちよつとお導きつてのに驚いてしま
って」

全く理由にならない返事をしてしまうが、本当のことを言うのは
恥ずかしい。

無償の善意かと思ったらあまりに打算的すぎてがっかりしたなん
て、そんなことは絶対に言えないし、言いたくもない。

この世界ではお導きを達成させようとするのは、当たり前のこと
（なにせ精霊様が導いてくれる正しい道なのだから）であって、そ
のことに何か思ったとしても無意味なのだからな。

シェローさんもレベッカさんも、全くの善人であるのは疑う余地
がないし、俺も別にもうなにか拘っているわけでもないのだけれど。

「……いいのよジロー。あなたが記憶喪失だって知っていたのに、
ちゃんと説明してなくて私たちも悪かったしね。……ちゃんとお導
きの最中だって言うっておけばよかった。……けっこうね、お導きが
原因で友情が壊れるってケースもあったりするのよ。男の場合はほ
とんどないんだけど、女友達同士だと時々、ね。ジローは見るから
に繊細そうだから……。だから、ごめんね」

ん？　これ俺が逃げた本当の理由に気付いてるよね。つか、それ
に対しての話をしているよね。レベッカさんいちいち鋭すぎるんだ
よな……。

かと言って認めるのも癪だと思い、「本当に気が動転していたん
です」などと言いついておいた。レベッカさんも「そう？　ならい
いけど」とこれ以上は追求してこなかった。

そうこうしているうちに街に到着した。

時間としては、もう14時くらいになるだろう。帰りのことを考えると、そうは活動できない。本格的な準備に入るのは明日からになるだろう。

そうそう。

エフタ氏との勝負自体は受けることにした。

これからの調査次第ではあるのだが、一度約束したことではあるし、逮捕がないなら、最悪負けても精霊石10個で済む。石はすでに2つも持っているし、勝負を受けた時からずっとだけれど、この勝負はなぜだか負ける気がしないってのもあったし。

それになによりも……。

天職板にまた新しい「お導き」が追加されていたことだし、な。

【バラカのお導き】

- ・ 市長の家に行ってみよう 0／2
- ・ 御用商との約束を果たそう 1／3
- ・ ???????? 7／10

……ん？

ハテナマークだらけのはなんぞこれ？？

第15話 異世界市長は女傑の香り

エリシエの街は、良く見ると確かにいろんなところで祭りの準備らしきことをしているのだった。

街路樹を赤、青、緑、白の布で飾る人、ヤグラのようなものを組み立てる人、屋台を引く人。

まだ10日以上あるためか準備自体はまだノンビリやっているようだ。

……異世界の祭か。屋台とかやったら儲かるかなあ。

馬を街の入り口で預け、レベッカさんとまずこれからどうするかを話しながら歩く。

とりあいず決まっていることは、奴隷商に行きエフタ氏が本物のソロ家の人間かどうか確認すること。市長についての情報収集とお宅に突撃。贈り物をなににするか協議。

新しい”お導き”が出たことは、そのままレベッカさんに話した。

昨日今日ですでに2つもお導きを達成しているのに、さらに新しいのが出たということに驚いていたが「天職が8つもあるんだから、ル・バラカによほど愛されているんでしょうね、ジローは」と納得したようだった。

???のやつについても聞いてみたがレベッカさんもなんだかわからないんだそうだ。

内容についても、「市長の家に行く」も「御用商との約束を果たす」も、どちらもこの勝負に関するものに間違いがないということ
で、驚いていたようだが「大精霊がそう導いて下さっているのだから、この話に乗っても大丈夫なんだろうね」と急に楽観的な感じに。

大精霊を過信しすぎなんじゃなかろうかとも思ったが、この世界ではそういうものなのかもしれないし、よくわからないな……。

ついでに疑問に思っていた「お導きに従わないという選択肢」について聞いてみる。

レベッカさんによると、一部の偏屈な人はお導きに従わなかったり（真逆のことをやったりするんだと）、天職板そのものを見なかったり、反精霊主義を掲げてみたりと、……まあいろいろいることはいるらしい。

他国では精霊信仰よりも、火神信仰とか女神信仰だとかのほうが強い国もあるらしく、そういった国では祝福自体も大精霊^{ル・バラカ}が行うものではないのだそう。なんつーか、神様みたいな存在がたくさんいるんだな異世界って。



.....。

昼は聞き込み調査をしながら、街の案内なんかをしてもらい、夜はいちいちシェローさんのところに戻って泊めさせてもらいながら、3日間が経過した。

とりあえず、わかったことは――――。

奴隷商館の人曰く、エフタ氏は本物のソロ家の人間であるとのこと。お供はつけずにいることが多いらしい。

奴隷商館に堂々と入っていくレベッカさんはとても男らしかった。そして俺は外で待ってた。

市長ミルクパールさんは、女性で50歳。娘が1人いるが、帝都に留学中。旦那も一緒に住んでいるはずだが、あまり一緒にいるところを見かけないらしい。

お導きの「家を訪ねる」はまだ実施していない。家の場所はもう調べてあるが。

ミルクパールさんはかなりの仕事人間のようで、あまり詳しいプライベート情報が入ってこなかった。せめて趣味や好きな食べ物でもわかればいいんだが。

仕事はかなりバリバリこなしているらしく、市民からの人気も高い。

ミルクパールさんの就任時には、まだエリシエはさほど大きい街ではなかったらしいが、今では第1自由都市マリシエーラとほぼ同等の規模を有しているんだそう。就任前には汚職や収賄が横行し、そこそこ腐敗してたのだが、彼女がそれを一掃したらしい。

なるほど、それなら贈り物作戦は普通じゃ上手くないわな。

ソロ家は帝都の御用商として手広くやっているらしいが、エリシエはまだほぼ未開拓に近く、わずかな奴隷を卸しているだけなのだろう。

エフタ氏はソロ家の3男坊で、マリシエーラの支部で長男のサポートをしながら商人修業中。つまり、あの男はああ見えて商人としては駆け出しということらしい。

きっと若いころに散々遊びまわってたんだろうと俺は決め付けた。

レベッカさんの情報収集能力がすごい。誰とでも親しく話しかけてなんでも聞き出してしまふ。元傭兵ってそういうものなのかな、そういうえば天職聞いたことなかったけど、そういう系統のものなのかしら。

宝石の価値について店で聞いたりして調べたんだが、こっちは地球ほど宝石が算出されないようだ。

量の問題ではなく種類が少ない。その代わり精霊石の加工物があるというわけだ。なら日本から宝石持ってくれば売れるかなーと簡単に考えたが、そう簡単な問題でもないようなのだった。

まず、精霊石を加工成型して宝石にするわけだけど、地球の宝石とは決定的な違いは、この石が精霊力の塊だという部分だ。精霊石由来の宝石は、精霊魔法でエンチャントして「マジックアイテム」にできるのだ。そしてそれをアクセサリに加工して装備するってわけ。精霊石万能すぎるだろ。

聞き込みのために、酒場だの宿屋だのギルドだの市庁舎だのいろいろ廻って、街の地理にもだいぶ詳しくなった。

エリシェの街の南側は港になっていて、他国からの交易品が届く窓口になっている。こっちの海も地球と同じような海なのかと思っただが、あまり波が強くないというか、ユラユラと海面が不自然に揺れているばかりだ。月が2つある所為だろうか。

風もあまり潮の香りがしない。海水が真水だったりして。

そういえば、魚食はどうなんだろうな、こっちの世界は。昨日今日と食べたものって野菜や肉ばかりで魚は見掛けなかったし、生態系が違う可能性もあるな。こんな立派な港があるなら、釣り道具とかも売れそうなんだけどなあ。

シェローさんの家の方角の逆側から街を出て、しばらく行くとルクラエラという鉱山街があるのだそうだ。

国内有数の鉱山であるルクラエラ山の採掘、精錬場から、徐々に発展していき今では小規模の街と言っても過言ではない規模なのだから。

しかもすぐ近くにダンジョンが2つもある為、探索者の為の武器

や防具の需要もあり、結果として採掘、精錬、生産を一括で行う一大鉱工業街となったのだそうだ。

昨日見かけたドワーフの一団もきっとその人たちに違いない。

つか、採掘と精錬と生産を一箇所ですべてやってるって、汚染が半端なさそう。そういうのの対策とかしないだろうしなあ……。

でも、鉱山街とかダンジョンとか男心くすぐりまくりなんで、一度はどんなもんか行ってみたいな。武器や防具もどなんなん売ってるのか見てみたいし……。この世界の金貨とかシェローさん家の短剣を見るに、金属の精錬技術はかなり高そうだし、期待できそう。

エリシェでは、まだ高級武器屋みたいのを見つけてないだけだからか、面白い……というか、良い武器売ってる店見つけてないんだよ。俺がナイフを売った店も大量生産品みたいな剣がメインだったしな。

よし、3日間でこれだけいろいろ調べられれば上出来だろう。

肝心の勝負に関係してる部分はまだ全然なんだけどな。贈り物をなにするのかもまだ全然考えてないしな。

まあ、とにかく明日はお導きもあるし、市長の家に行ってみることにしよう。



次の日、俺とレベッカさんは市長宅を訪れていた。

それなりに立派な石作りの二階建ての建物である。こういう家ってなんていうのかな？ ヨーロッパの古い街なんかを紹介するTV番組なんかでよく見るタイプの建物だけれど。

重厚な木製の扉で、ハメ殺しの窓があつて、スレートの屋根で…。

純粹にこういう家っていいよな。憧れるよな。別宅として欲しいよな。

ドアベルを鳴らす。

しばらくして出てきたのは、50過ぎくらいの禿頭と総ヒゲのワイルドな男性だった。エプロンなんか着けちゃって、なんかの職人なのかな。

レベッカさんが応対しようとするが、ここはネタの仕込み的にも俺が応対しなければならぬ。

つか、レベッカさんここ数日過ごしてわかったんだけど、姉御肌というか、すごく甘やかしてくれるというか、居心地は良いけど男をダメにするタイプかもしれない。むしろダメにされたい。特に俺みたいな末っ子には毒すぎるぜ！ 人妻ってのも案外ポイント高いような気がしてきたぞ！

……冗談はさておき、ここはミスなく対応しなきゃいかん大事なポイントだ。上手くやらなきゃな。

「はじめまして。僕はジロー・アヤセというものです。宝石商をやらせていただいているものなのですが、ビル・リンデンローブ様でしようか？」

「そうだが。宝石商がうちになんの用だ？」

「当然、良い宝石が入ったのでご紹介に……、と言いたいところですが、10日ほど前に『こちらに宝石を見せに行きなさい』という”お導き”がありましてね。——中で話をさせていただいてもよろしいでしょうか？」

「面倒だが、……そういうことなら仕方がないな。入れ」

けっこう強キャラ系かな。正直けっこうビビってるけど、スーパーボディーガードのレベッカさんもいることだし、なんとかなるだろう。

この人はビル・リンデンローブ氏。例のあまり嫁と一緒にいないダンナさんだ。この人はなにか家でする仕事をしているらしいのだ

が、その内容は調査しきらなかった。まあ、それ自体はまあどうでもいいんだけどな。

家に入ると”市長の家に行ってみよう 0/2”を果たした
ことになったらしく、天職板があらわれ、”市長の夫に真実の鏡を
使ってみよう 1/2”に変化した。

あれって人間相手にも有効なのか……。どこまで暴くのかわから
んけど、ちょっと怖いな……。

応接間に通される俺とレベッカさん。

レベッカさんが「どうしてお導きの内容ウソついたの？」と小声
で聞いてくるが、とにかく任せて欲しいと頼む。

お導きの内容といえば、真実の鏡のことはまだレベッカさんにも
言っていないし、これについてはレベッカさんにも嘘の申告をしなき
ゃならないんだよね……。まあ、どちらにせよ、クエストはここで
クリアしちゃうし大丈夫か。

ビル氏と向かい合って座り、切り出した。

「宝石を見せる前に、お聞きしたいのですが近々宝石が必要になる
ようなイベントがなにかおありなんですか？ 宝石を見せようなど
というお導きは私もはじめてでしてね。なにか特別な記念日かなに
かが？」

「いや、特にそういうものはないな」

「誕生日であるとか、結婚記念日などは？」

「どちらもまだ数ヶ月は先だな」

その後いくつか質問をしたがまさにノレンに腕押し。ちょっと作戦を変更することに。

「では、宝石を見ていただきましょうか。お導きがあるということ
は、なにかきつと宝石が必要ななにかがあるはずだと思うのです。
僕はそのお手伝いができたらな、と思っているんですよ。精霊の導
いた縁でもありますしね」

そう言って、ジュエリーケースを出す。
さりげなくケースを持ってビル氏の横に座り、ケースを開けた。

（真実の鏡）

宝石を見せるふりをしてビル氏に軽く触れながら念じる。これっ
て使うときに、相手に触ってなきやいけないってのがちょっと厄介
だな。

真実の鏡が発動し、ビル氏の詳細情報が天職板に表示されていく。

……うわぁ……、すげえな真実の鏡。

今は応対中でじっくり見れないけれど、ひとまず使えそうな情報
は得られた。

良い作戦も思いついたので、この路線で行こう。

物珍しそうに宝石を見ていたビル氏が言う。

「……おい、これはなんだ？ 精霊石か？ これほど美しく成型さ

れたものはじめて見るぞ……。お前、その服からすると帝都の商人なのか？」

「はい。帝都から来ました。どうです？ そちらは僕としてもお奨めの一品でしてね。向こうではペリドットと呼ばれている石なのですが、指輪やネックレスなどに加工して奥様に贈られては？ もちらんエンチャントもこちらで代行させていただきますし、一生の宝物になりますよ。っと失礼」

売り口上の最中だったが、お導きの達成による精霊石の受け取りを済まさなければならぬ。つか、勝手に精霊さまが出てきて渡してくるだけなんだけどな。

天職板が光って、ポンツと妖精（いちおうこいつが精霊さまらしいが）になる。3回目ともなるともう慣れたな。

「よおよお、悪そうなツラしやがって、おまえにはこの濁った色の石がお似合いだよ。じゃあな。これからも世のため精霊様のためにガンバッテくれよ」

ポンツ

でっという。

今回の精霊石は……うはあ、青が主体の虹色の石……。

これってひょっとして、いやひょっとしなくても……オパール……。

これって濁ってるって表現するのか、精霊の基準がよくわからんな。

オパールは高級石だぞ！

「ありがとうございます。どうやらこれでお導きの達成となったようです。どうでしょう？　これもル・バラカのお導きですし、その石がお気に召したのであればお譲りしますので、奥様にお贈りなさっては？　僕としてはネックレスにするのがお奨めですよ」

ちょっと強引に押してみる。ペリドットもそれほど高価な石でもないのですが、精霊石を得た見返りとしてタダであげてしまっても別に惜しくもない。今はとにかく、ビル氏をその気にさせなければ……。

「しかし……、俺はこういったものを家内に贈ったことがないのだ……。渡そうと思ったことはあるんだがな、どうも気恥ずかしいのは苦手でな……」

お、その気になってくれたようだ。よかったよかった。

強キャラ系かと思ったら、男なんてこんなもんよ。あとは、上手いこと言いくるめっちゃえば出来上がり。

「そういうことでしたか。……では、こういうのはどうでしょう――

さーて、あとは細かい仕込みと、俺自身のパーティ参加の準備だな。

第16話 異世界礼装は貴族の香り

エフタ氏との約束の日は良く晴れた。

いやあ、絶好の勝負日和ですなあ。^{エルフ}首を洗って待ってろよ！

市長の家を訪れた次の日から、時々レベッカさんに付き添ってもらったりしながら準備をしたが、今日は特に最後まで見届けてもらうつもりだ。

なんたって、初の異世界パーティ！ ルールが分からず恥かいたりしても何だしな（フィンガーボールの水飲んだりとかな）。

それに、単純にエフタ氏と1対1ってのも微妙に不安があるし、誰かが付いていてくれれば心強いもんね。

せっかくのパーティだからということで、今日はシェローさんも来るそうだ。「おめかししなきゃー」とか言ってたけど、どんな格好でくるのかな。

と、来たようだ。2人とも大柄だから遠くからでも目立つな。

……おい、2人とも服装すげえぞ。

「待たせたなジロー。お、馬子にも衣装だな。レベッカが選んだのか？」

「そうよー。カッコいいでしょう。中古だけどねー」

「……お2人の服装のほうが凄いですよ。なんですかそれ？ 騎士
礼装？」

2人はおそろいの花の刺繍鮮やかな^{えんじいろ}臙脂色のフロックコートに身を包んでいた。インナーにはフリルの付いた白いドレスシャツを着て、コートのボタンは2点だけ留め、内側にはジレが覗いている。腰に白銀の片手剣なんかぶら提げちゃって、絵になりすぎて困るわあ。

シェローさんは普段の不精ヒゲにざんばら頭を綺麗に整えて、ナイスミドルというかちょい悪オヤジというか……。190cmは超えてるであろう高身長も相まって、これなんてハリウッドスター？
といった感じ。

レベッカさんは普段ひつつめているセミロングの赤毛を垂らして、一部を三つ編みなんかにしちゃって、化粧もばっちりキメてている。朱の口紅が色っぽい。

もともと美人だとは思っていたけど、これは超美人だと言わざるを得ない。いやあ、ふつくしいわあ……。そうだ！ 写真撮らなきゃ！

「これねー。傭兵やってたときにちょっと大きい戦果上げてね。それで叙勲式やるから出ろっていうから、みんなでおそろいで作ったのよ。最初はもっと安くて簡単なもの作るはずだったんだけど、話してるうちに段々調子乗っちゃってねー、高くついたわあ」

なるほどな。傭兵でも叙勲式とかってあるんだな、この世界。なんかどんなに活躍してもお金もらってサヨウナラなイメージだったけども。

強い傭兵団なら困ったかないと敵にまわっても厄介とか、そういうのでもあるのかもな。

ちなみに、馬子にも衣装と評された俺も、いつものシェイクスピア服から、貴族風の服にチェンジ。レベッカさんの見立てで買ったんだけど、中古のくせに結構高かった。

生地色と同系色の糸で刺繍が施された濃紺のジャケットと、シンブルなパンツ。黒のシャツ、革のベルト。靴は高かったので、家から黒の革靴を持ってきた。

パツと見た感じ、ちよい昔のヴィジュアル系バンドの人みたいだ。でも、シックでなかなかカッコいいと我ながら思う。……まあ、225エルもしたからね……。

あとは、シェローさん達みたいに俺も佩刀してみたい。でも、商人が剣とか持ってたら変かな。短剣くらいにしといたほうが無難かしら。

3人で中央広場に向かう。もうすぐ約束の時間だ。

エリシェ50周年祭は昨日から開催されている。

今回の勝負の準備なんだで、まだ祭見物をしていないが、これが終わったらゆっくり周ってみたい。気になる屋台もたくさん出ているし、できることならエルフの少女といっしょにな！　ゲヘゲヘ。

通常の3倍は混んでいる道を進み、待ち合わせ場所の中央広場に辿り着く。広場は幾種類もの屋台が軒を連ね、ヤグラが建ち、篝火が焚かれ、祭特有の喧騒に包まれていた。

住人も街並みもヨーロッパ風なのに、祭の雰囲気は、どうも日本的。屋台のラインナップもどこか懐かしさを感じるものだし。

輪投げの屋台とか久しぶりにみたなあ……。

さて、エフタ氏は来てるのかな。こんなに人出があるとは思っていなかったで、待ち合わせ場所としては失敗だったかもしれない。漠然と中央広場前としか約束していないしなあ。

……あ、いた。

ノンキにお供のエルフ男と2人で屋台の焼きウドンなんか食ってやがる。なにやってんのあの人。

エフタ氏本人もけっこうな美形だけど、それよりエルフ男だよ。超美形の紫のローブを身に纏ったブロンドヘアの男性エルフが焼きウドンを立ち食いせず？ うん、一周してカッコいい。

「こんにちは。遅くなってすみません、これほど混むと思わなかったもので」

こっちには気付いてないようだったので、話しかけてみることに。

俺が話しかけると、こっちをチラッと見たエフタ氏。その後また

すぐ視線を戻し、すぐにまた俺も見た。

二度見すんな。

「……これはこれは。……本当に来たんですね。いやあ、自分言うのもなんですが、かなり不利な条件を出してしまいましたし、絶対に来ないだろうと思っていたのですけれど」

「約束ですから……、と言いたいところですがね。実はやっぱり逃げようかとも思っていたんですよ。でもあの後、お導きが出ましてね」

「……………！！ お導きが出たんですか？ どういう内容の？」

「いえ、普通にあなたとの約束を守れという内容のものですけれど」

なにを急に驚いたんだろう、この人。お導きフリークか？

「そうですか……。そう……。まあ、そういうこともありえるのか……。しかし……」

なにやらブツブツ言い出すエフタ氏。本当に大丈夫か？

「若、この者が例の？ ならばさっさと契約してしましましょう。どちらに転ぶにせよ、こちらの不利益にはなりませんまい」

と、エルフ男性が口を挟む。サラッと爆弾発言するなよ、それじゃあどちらに転んでも俺が損するみたいじゃないか。

あれ？ つまりそういうこと？ 本当に契約して大丈夫か？

ブツブツ言っていたエフタ氏も、エルフ男の助言を聞き咳払いを

1つしてこちらに向き直る。

「ジローさん。それでは私とエルフを賭けて勝負をするということ
で、今から精霊契約を結びますがよろしいですか？ 勝負の内容は、
今夜のパーティーでエリシェ市長に贈り物をし彼女がそれを入
ればあなたの勝ち、そうでなければ私の勝ちで」

「そうですね。概ねそれでよいのですが、市長が贈り物を気に入
ったかどうかの判断はどこでするんですか？ あと、僕が主導して贈
るものならなんでも良かったんですね。物品に限らず」

「……いえ、贈り物は物品に限ります。さすがに『面白い話』や『
大道芸』のような余興は今回の『贈り物』とは見なされません。物
品であればどんなものでも構いませんよ。次に、相手が気に入った
かどうかをどう判断するか、ですが『相手がそれを受け取り、感謝
の言葉を口にする』のを判断基準としましょう。よろしいですね？」

……まあ、大丈夫だな。

俺が頷くと、エルフ男が精霊契約の魔法を使うということで、俺
とエフタ氏を並んで立たせる。2人の手を取ると祝福の時の神官ち
ゃんと同じように、なにか呪文のようなものを唱え始めた。

お互いに名前と年齢と性別を聞かれたので答える。祝福の時も聞
かれたけど、精霊契約では必ず必要なんだろうか。

エフタ氏は驚きの22歳だった。ほぼ同じ歳だったとは……。も
っと上かと思ったな。

その後もブツブツを呪文を唱えていたが、最後にカッと光が包み、
それで契約が終了した。祝福の時とだいたい同じだな。

「契約はこれで完了しました。ご確認ください」

ご確認くださいとか……。あ、天職板かな。

そう思い確認してみると、【バラカのお導き】の下に新しい欄があった。

【精霊契約】

ジロー・アヤセとエフタ・ソロとの勝負要綱

15日のパーティ中にジローはエリシェ市長ミルクパール・リンデンローブへ贈り物をしなければならぬ。

相手が贈り物を受け取り感謝の言葉を口にすればジローの勝ちとなる。

その場合ジローはエルフの少女をエフタから受け取る。

ジローが負けた場合は精霊石10個をエフタへ支払わなければならない（未来取得分を強制的に篡奪する権利をエフタは有する）。

この契約が果たされなかった場合、果たさなかった者の祝福が失われる。

なるほど、これが精霊契約か。ちゃんと文書として？ 出るのが凄いな。これエルフがウツカリ契約内容間違えたりしたら、けっこ

う悲惨なことになるんじゃないのかなあ。

「確認しました。内容も間違いありません。それでどうしましょう、パーティにはこのまま向かうのですか？ ああ、こちらも連れがいるのですが、いっしょによろしかったでしょうか」

「はい。構いませんよ。会場へは私の紹介で入れますし。もう向かって大丈夫でしょう」

「……あ、それと、僕が買ったらアレできるエルフの少女は連れてきているんですか、今日？」

ついアレとか言って濁してしまう。ヘタレ乙。

ハッキリ奴隷とか言えばいいのに！ やっぱ現代日本人にはヘヴィだよ奴隷って単語はさ！ その手のナニなゲームでなら平気だけんどもよ。

「……………」

「……………」

「もちろん連れてきておりますよ。ご安心ください。この勝負が終わりましたらすぐに受け渡しいたしましょう」

……なに今の間は。なぜエルフ男と顔を見合わせた？

いちいち心配になるな……。やっぱ騙されてんのかな俺。

ちなみに、「御用商との約束を果たそう 1／3」は「御用商と

商取引をしよう 2／3」に変化した。
勝っても負けてもこの人とは付き合いが続くってことなんかなあ。

第17話 祝賀パーティは酔っ払いの香り

4人で会場へ向かう。

途中でエフタ氏の連れのエルフ男は、所用があるからと離れ、俺とシェローさんとエフタ氏の3人になった。

レベッカさんは別の用事で一時的に抜けている。

エルフ男はエフタ氏の護衛も兼ねてるのかと思ったのだが、精霊契約のために連れて来ただけだったらしい。

「エフタさん。こんなことを聞くのも変ですが、護衛を付けなくても大丈夫なんですか？」

「いえ、本当は付けたほうが良いのでしょうけれど、どうも煩わしいのが苦手な性分ですてね」

そんな理由で……。

でも大商家の3男坊で、好き勝手やってきたんだろうし（俺の決

め付けだけど）、護衛だかお目付け役だかわからんのが傍にいるのは嫌なんだろうな。

それか、俺が考えているより、ずっとこの世界の治安が良いのかもしれないだけかも知れないけどもな。

「それよりもジローさん、贈り物は何にしたのですか？」

……さすがにそれは言えないぜ。

最初に考えていたよりもだんだん大掛かりになってきてしまつて、レベッカさんに協力してもらいながら準備したけれど、異世界人がどう感じるかだけはちよつと冒険。

「贈り物は……、秘密です。まあ楽しみにしててください」

「ほう、自信があるのですね。……そうでなければこの勝負は受けられなかったでしょうけれど、市長のことはお調べになったでしょうから、簡単にはいかないとは思わなかったのですか？」

「当然思いましたが、なぜだか負ける気がしなかったんです。もちろん、贈る品にも自信があるんですけどね」

「……負ける気がしませんでしたか。では余計にどんな品なのか楽しみですね。あのお堅い市長が気に入るのかどうか、………期待していますよ」

負ける気がしないってのは、ちよつと挑発的だったかな？　とも思ったが、エフタ氏はむしろ満足そうに微笑んで見せたものだ。

しかし……、どうも負けたくないという気配が感じられないんだよな、この人。それともボンボンなんてこんなもんなのかな。

ま、いまさら言っても仕方がないか。サイは投げられたのだ！

パーティ会場は官庁前の芝生の植えられた広場だ。

テーブルには、屋台料理よりは多少豪華だが、パーティ料理というには多少豪快なものがいろいろとすでに並んでいる。料理だけでなく、飲み物も酒にジュースにお茶にと、いろいろ用意されているようだ。早速シェローさんが目を輝かせている。

楽団がエスニックな響きのする音楽を奏で、招待客たちはすでに思い思いに楽しんでいた。

「ジローさん、あの方がエリシェ市長ミルクパールさんですよ」

エフタ氏が指し示すほうを見る。

白い清潔なスーツ姿の神経質そうな女性が、来賓と挨拶を交わしている。なるほど、確かに潔癖そうだ。某大国の国務長官を思い出すな……。

「エフタさん、それで贈り物はどうしましょうか。どういうタイミングで贈るとかあるんですか？」

「そうですね……。まだパーティは始まったばかりのようですし、もう暫くしたら私が挨拶に行きますから、その後にでも」

「わかりました。ではこちらはこちらで準備をしておきます」

ま、準備なんてもうほとんどないんだけどね。レベッカさんが戻り次第、いつでもはじめられる。

それまでは、シェローさんと料理でも食べてるか！



「ういゝ。いやあ、意外と強い酒でしたなあゝシェロー氏」

「ハッハッハッ。内陸の酒はもつとあんなものではありませんぞ、ジロー氏」

ちよつと気付けの一杯と思って飲んだら、存外飲み口軽やかでかるく酔っ払っちゃったわあ。シェローさんもいい感じに酔っているし、ちよつと調子こいちゃったかもしれん。

そういえば、レベッカさんに、シェローさんに酒を飲ませるなどか言われてたような？ ……まあ、いいか。祭だしな！

これから一勝負あるけれど、酒が表に出るタイプでもないしパティの席上でのことだ、酔っていても特に不具合はあるまい。

と、どうやらレベッカさんが来たようだ。向こうから合図を送ってくる。

さって、いよいよだな。

招待客と歓談しているエフタ氏を見つけ出し話しかける。

「エフタさん。どうでしょう、そろそろ」

「ああ、ジローさん。そうですね、ちょうど市長も体が空いたようですし、行ってみますか」

「はい、よろしくおねがいします」

2人で、市長のところへ向かう。シラフだったらこれからすることを考えてもそこそこ緊張しただろうけれど、酒が俺を大胆にしているぜ。やれる！

エフタ氏が市長と挨拶を交わしている。

俺のことを紹介してくれるまでは横で待機。その間に、機材のチェックをしておく。

「…………、それでこちらが、その話のジローさんです。ジローさん、こちらがエリシェ市長のミルクパールさん」

「はじめまして、私は宝石商のジロー・アヤセです。お目にかかれて光栄です」

紹介を受けて挨拶し握手を求める。

今回勝負を受けた理由のもうひとつの理由がこれだ。

図らずしてこの街のトップを紹介してもらえらというのは、この街で商売する上でいずれ大きな価値を持つ時が来るはずだ。

……まあ、それもここからの売り込み次第ではあるんだけどな。

「はじめましてジローさん。あら、ずいぶんとかわいい宝石商さんね。先に一言言っておきますけれど、その若さでソロ家の人間なんかと係わり合いにならないほうがよろしいわよ。彼らはみな魔界の住人ですからね」

かわいいって……。いやまあ、こっちの男ってガチムチが多いからなあ。そんな評価でもしかたないか……。ただでさえ童顔なのに。しかし、エフタ氏、普通に嫌われてるんじゃないのかこれ。魔界の住人とまで言われちゃって……。

「それで……。あなたが私に贈り物を下さるの？ 先に言っておきますが、私はそういった物の受け取りをお断りしています。仮にも私は皇帝より統治権を任されている身。そうしたつけ届けを受け取っているのは、精霊の示す道を見失いますからね」

「存じております。……ですが、商品だけでも見ていただけますでしょうか。気に入らなければお受け取りを拒否なさっても構いませんで」

そう言って、バッグからオリーブグリーンのネックレスケースを

取り出す。このケースは向こう^{日本}で買ったものだ。おそらくこの手のものは向こう^{日本}のほうが安いだろうし、物も良い。

俺自身も酔いにまかせて一気に営業モードに入る。

「今回あなたにお贈りしたいのは、こちらのペリドットのネックレスです。石の大きさは4カラット程度ですが、深いオリーブグリーンをより引き立てるオーバルカットに成型した精霊石と、土台には、ペリドットとは最も相性が良いとされる金^{ゴールド}を。こちらでも職人の手で美しく彫金を施しました」

掴みとしては、まずバツと商品説明。どの程度異世界でこれらの単語が通じるのかわからんけれど、そのへんは別に重要じゃない。相手が「なんか凄そう」と思ってくればそれだけで十分だ。

「素敵ね。緑色の宝石はいくつか見たことがありますが、これほどの深い色合いのものは初めて見ます。ですが、……確かに素晴らしい品だけれど、なおさら受け取るわけにはいかないわね。ましてあなたやエフタ君のような商人からは」

まあ、そうだろうな、今の段階では。さあ、どんどん続けよう。

「いえ、今回この品は私が用意こそしましたが、本当の贈り主は別にいるのですよ。……心当たりはございませんか？」

「いえ？ 私が贈り物を受け取らないことは国中の者が知っていま

すから。いまだにがんばっているのは、それこそエフタ君ぐらいのものだわ」

本当に全く思い当たらないようだ。

まあ、だからこそ効果的なんだろうけれどもな。

「古来よりペリドットは金と相性が良い宝石と言われています。そして、その相性の良さから『お互いを輝かせる』組み合わせ、つまり夫婦愛の象徴として愛されてきました。そして、そこから生まれたペリドットの宝石言葉は『夫婦愛』……。そのネックレスに施された彫金。見覚えがございませんか？」

いぶかしげにネックレスの土台の金の彫金を確認するミルクパールさん。ここで気付くかどうかはある種の賭けではあるんだが、若いころよく使っていたモチーフだと言っていたし、気付いてくれるだろう。

「……………！ ……え、これって……。でも……」

うろたえてる。うろたえてる。

軽く混乱しているうちに話を決めるべく、レベッカさんに合図を送り、昨日のうちから会場に持ち込んでおいた電池式のマイクと小型アンプの電源を入れた。

ボリュームはマックスに調整してある。これなら会場内であればどこでも俺の声が聞こえるだろう。

「あ、あー、みなさま、本日はエリシェ50周年パーティーにおいで

くださいます。これより市民を代表いたしました、市長ミルクパール氏に感謝の意を表し花束の贈呈を行いましたと思いますので、ご歓談中のところ申し訳ありませんが、ご注目ください」

突然始まったイベントにざわめく招待客のほうを向き直る。
さて異世界人にも効くといいなこの趣向。

多少強引だけれど、こっちの世界のパーティはだいたい好き勝手に歓談して、好き勝手に次の会場へ移るといった雑なものらしいので、問題になったりはしないだろう、多分。

アンプやマイクに不思議そうな顔をしている人もいたが、シェロ―さんに「あれ新しい魔道具なんですよ」と吹聴してもらい、すぐに沈静化した。

「会場入り口をごらんください。本日のために他国より取り寄せた、白バラの花束。白バラの花言葉は「尊敬」。我々エリシエ市民から市長への尊敬を込めてこの花を贈らせていただきます。普段は贈り物を受け取りにならない市長ですが、この場だけは譲歩していただきますでしょう！」

白バラの花束は、向^{日本}こうから持って来たものだ。こちらではそれほど高度に品種改良された花をまとめて手に入れるのは難しい上、値段も高い。いや、まあ、向こうでもかなり高価だったけどね。

招待客たちも、特にこのイベントに疑問を感じたりはしていないようだ。譲歩していただきましたよのところでは軽い笑いすら起きたくらいだし、問題なさそうだ。

花束を持っているのは、ビシッと黒いスーツを着た中年の男だ。後にはレベッカさんが控えている。

市長は花束よりも、そちらの男性のほうを呆然として見つめている。市長が小声で「あなた……」と呟くのが聞こえる。

花束を贈呈する中年男性は当然、市長の夫ビル氏だ。

この日の為にスーツを新調し、髪もヒゲも整えている。

ドタキャンされても困るので、レベッカさんには迎えに行ってもらっていたのだった。

いや、しかし、彼にこのイベントへの参加を譲らせるまでに、一週間毎日通ったものだよ。今も本心では嫌々なのかもしれないが、ここまで来たからには彼にもがんばってもらおうしかない。

余程目立つのが苦手なのか真っ赤になっちゃって、ちょっと気の毒だけど。

そして向かい合う2人。

花束が市長へと贈呈され、拍手に包まれる会場。

「……このネックレス、あなたが作った物ね。このヘリパイルのモチーフ、懐かしい……。あのころ、師匠にダメだしされた気晴らしによく作っていたものね」

「……ああ。懐かしいだろう。あの男に、一目で俺が作ったとわかるデザインにしろと言われてな。おかげで昔のことを色々と思い出しながらの作業だったよ」

「ふふふ、あなたが上手く丸めこまれてこんなところまで出てくるなんて……。これはさすがにやられちゃったかしらね」

まだ余裕があるようだけれど、ミルクパールさんからすれば、このイベントは完璧な不意打ちだっただろう。

結婚する前も、結婚してからも、ビル氏は仕事を優先する職人気質な寡黙な夫で、プレゼントなどしたことがないということだったし、ミルクパールさんにしても、政治家という職業上留守がちで、なんとなく擦れ違う日々が多かったそうだ。

そして、そのままその距離間が当たり前の夫婦の距離感となり、これまで来たということらしいのだが、話を聞いたところお互いを必要以上に尊重しているだけのことで、愛が覚めたとかそういう関係ではなさそうだった。

真実の鏡で覗き見たビル氏クラフトマンの天職は、細工師だった。

初訪問の日、エプロン姿で出てきたが、作業場が家の中にあり注文販売を基本として細々と細工師をやっているらしい。

作品を何点か見せてもらったが、金属の彫金は当然として、ナイフの柄の作成、刀身への飾り文字の打ち込み、金属鎧への文様付け、簡単な小物の作成、などなど、器用にいろんな物を作っている。

中でもやはり彫金の技術は素晴らしく、この人の作ったものを独占して日本で売らなきゃなどといやらしい商売っ気を出してしまっただものだ。

当然、ネックレスの土台部分はビル氏本人に作ってもらった。彫金師のくせに、結婚してから一度も自分で作ったものを贈ったことがないっていうのだから呆れる。でもまあ、それが今回はむしろプ

ラスの働くのかもしれないのだけどさ。

さて、イベントは当然まだ少しあるのだ。どんどん行こう。鉄は熱いうちに打てとも言おうしな。

「さてみなさん、こちらの花束を贈呈した男性、知らない方がほとんどだと思われますので紹介いたしましょう。ミルクパールさんの夫のビル・リンデンローブさんです。このたび、エリシェ50周年の記念日にあたりまして、市民の為に働く妻へ、感謝の気持ちを込めて贈り物をしたいとの申し出がありまして、この場をお借りした次第です」

一気に多少の脚色を交えて紹介すると、招待客の間から「あれが……」「初めてみるが優しそうな旦那じゃないか……」「そもそも結婚してたんだ市長……」などと声上がる。

「ビルさんの職業は細工師でして、今回は彼自身が心を込めて製作した精霊石のネックレスを市長へと贈るといことです。精霊石には、妻の身を案じる夫の気持ちを込めて『病魔退散』の加護が付加されており、また精霊石も『夫婦愛』の宝石言葉のあるペリドットを選ぶなど、結婚30年目にして、エリシェを代表するカップルに相応しい熱々ぶりであります！」

観衆のボルテージもだんだん上がってくる。基本的にみんな酔っ払いなので、こういうイベントはおいしいんだろう。最前列で手を叩いて喜んでいるシェローさんが気になるけど、まあ良い賑やかしだよ！

「実は私、今回こちらのビルさんより手紙を預かっております。彼

の妻に対する感謝の気持ちを綴った手紙ですが、自分で読むのは恥ずかしいということで、私に託されたものです」

ミルクパールさんが驚いている。

ビルさんはもっと驚いている。

そりゃそうだ。手紙なんて託してないんだからね。俺が話を聞きながらメモった要素を勝手に上手く手紙にしてきたものだもんね。ちよっと情報量が少なかったから苦労したけどな。

「それでは僭越ながら読ませていただきます。……………妻へ。口下手で上手くお前に感謝の言葉を言うことができそうもなかったの、こうして筆を取らせてもらった。30年前、2人で食べたヘリパイルを覚えているだろうか。見た目が可愛いヘリパイルを食べるのは可哀想と言うお前に無理やり食べさせたことを、このネックスを作りながら思い出していたよ。食べてみたら意外と美味しいと喜んで俺よりも多く食べていたね。今だから言えるけれど、お前と結婚しようと思ったのは、実はそのときの姿が可愛かったからだというの、お前も知らなかっただろう。結婚してからお前がエリシエの為に、どんなにがんばってきたか、ずっと近くで見ていた俺が一番よくわかつているつもりだ。上手く感謝の言葉を口にするのができなかったけれど、お前の夫であることを誇りに思っている。…………でももう30年も経つんだな。あれからヘリパ村へは一度も行かなかったけれど、お互い歳を取ったし、娘ももうすぐ1人立ちする歳だ。また一緒にヘリパ村へ行って、動けなくなるくらいヘリパイルを食べよう。ネックス気に入ってくれると嬉しい。ビル・リンデンローブ」

会場は拍手の雨に包まれた。

手紙を読み上げるなんて演出、地球じゃもうベタもベタなんだけど、異世界じゃあ最新鋭ですよ。招待客のマダム達も涙ぐんでるよ。最前列でシェローさんが男泣きしてるのが気になるけど、まあ良い賑やかしだよ！

ミルクパールさんもさすがにこれには効いたらしい、瞳を潤ませ、熱っぽくビルさんを見つめている。

しかしビルさん当惑顔。まずい、ビルさんの許容範囲を超えそうだ！

「それでは、ビル・リンデンローブさんから奥様へネックレスが贈られます。ビルさん、ネックレスを奥様の首にかけてあげてください」

俺の言葉を受け、ミルクパールさんの手からネックレスを受け取り、ぎこちなく相手の首にネックレスをかけるビルさん。緊張を通り越して青くなっていたけど、そこは見なかったことにしよう。

ネックレスがミルクパールさんの首にかかるころには、招待客も是非その宝物を見物しようと、ワツと集まってきている。

上品なオリーブグリーンの輝く宝石と淡く輝くゴールドのネックレスが、ミルクパールさんの元々持つ気品と相まって、えもいわれぬ輝きを放っている。

ビル氏には最後の仕事をしてもらわなくちゃならない。俺はマイクを外し小声でビル氏に話しかけた。

「ネックレスをかけたら、最後に奥さんに一言あげてください。それが最後の締めですから、よろしくおねがいします」

俺がそう言うと、意を決したビル氏がミルクパールさんに向き直る。

俺はコッソリとビル氏のところにマイクを持っていき、声を頂戴した。

「……30年間ありがとう。これからよろしくな」

そして抱き合う2人。

ああ、この辺は欧米的なんだな。日本だったらなかなかハグはない。しかし、ビル氏……、本当に一言だな。

そして会場のボルテージもマックスに。いやあ、招待客のみなさんも楽しめたようだし良かった。これこそWINWINの関係だよ。俺もついつい笑顔になってしまうな。

あとは、最後に一言市長に貰えればOKだ。

ま、暫くは2人の世界に入っちゃってるだろうから、俺も休憩しよう。

と、ジュースでも飲もうとテーブルに向かった時だった。

会場の隅にエフタ氏の連れのエルフ男がいるのに気が付いた。

あ、来てたんだと思いはしたが、あまり気にはしなかった。

エルフ男の横にダボダボの緑のローブに身を包み、フードを目深に被った人物がおり、顔は見えなかったが、目が合ったように感じた。

瞬間、天職板が出現し、いつもよりも強く輝き新しいお導きを示した。いや、????のやつが変化したんだなコレは。

・運命の大車輪 8／10

第18話 ヘリパイルはうなぎの香り

「ミルクパールさん。どうでしたでしょうか。贈り物、受け取っていただけますか？」

「ふふふ、もちろん受け取らせてもらうわ。……ありがとう」

「喜んで貰えてようですね。僕も用意した甲斐がありました」

「本当に嬉しいわ。あの人がこんな風に思っていてくれていたなんて、思ってもいなかったのよ。あなたがこうして下さらなかったら、一生知ることなかったのかもしれないわね。……今は本当に最高の気分」

そう言って、首元で輝くネックレスに触れるミルクパールさん。俺は「光栄です」と返し、エフタ氏に向き直った。

なにはともあれ、これで勝負は俺の勝ちだわー。貰えるわー。これでエルフ貰えるわー。

「お見事でした、ジローさん。まさかこんな手で来るとはさすがに思いもありませんでしたよ。これは私の完敗ですね」

「正直、運に助けられた部分もあるんですけどね。でも市長も喜んでくれるようですし、よかったなと思います」

「そうですね。これほど喜ばれる贈り物はなかなかありませんよ。これからは私も参考にさせていただきます」

「ははは、上手くやってください。一番大事なのは相手の虚を付くことですよ」

「なるほど。相手が思いもよらないというのが大事なんですね」

「そうそう。……ところで、これで勝負は僕の勝ち……、ということとで、エ、エルフを貰えるということなんでしたね。段取りとしてはどうします？」

「もちろん、約束ですし、契約も交わしておりますからエルフは当然お譲りしますよ。ただこちらにも引渡し準備がありますから、あと2ユルカ程度はこちらでパーティを楽しんでいてください。またお迎えにあがります」

「わかりました。楽しみにしています」

そうして、エフタ氏と一旦別れる。

準備ってなにをするのかな。引渡しのために綺麗なべべなんか着せちゃって、化粧とかまでしちゃったりするのかな。

呼んでもらう呼名は、「ご主人様」か「旦那様」か。あるいは「^{あるじ}主さま」か、「ジロー様」も捨て難いな。あ、「おにいちゃん」なんてのも有りかな。俺、末っ子だから妹欲しかったんだよ！ ん？

誤解しないでよね！ 健全！ 健全ですぞ！

いやあ、しかし、うへへへへ、夢が広がりんぐ。ですなあ。

つつい飲みすぎちゃう！！

エフタ氏が来るまでまだだいぶあるので、レベッカさんとシェローさんにお礼しとかなきゃな。

レベッカさんは街ではそこそ顔が知れているのか、顔見知りらしき招待客と楽しく談笑していた。シェローさんも招待客と談笑……：とかバカ騒ぎしている。ホントに酔うとグダグダになっちゃうタイプなんだなシェローさん。まあこの酒は確かに美味しいし、飲みすぎちゃうのはわかるけど、つか俺もすでに結構酔っているけども。

シェローさんにはお礼したとこで、もう明日には忘れていると判断。

レベッカさんだけでいいか、今日のところは。

「おつかれさまです。レベッカさんいろいろと使ってしまったて、ありがとうございました。おかげでなんとか贈り物は喜んでもらえたようです」

果実酒を飲んで、ほんのりと頬を朱に染めたレベッカさんはかなり色っぽい。普段とは髪型も違うし、化粧もしているからか、余計にドキリとしてしまう。酒の勢いで行ける所までいっちゃいたいくらい。

「おつかれさまジロー。こんなに盛り上がるとはねー。最初話を聞いたときは半信半疑だったんだけどね、実は」

「いえ、僕もうまくいくかは賭けだったんですよ。ただ漠然とした上手くいくという予感だけがあっただけで」

「そうなのー？ そのわりには堂に入った司会ぶりだったわよ。手紙のところでは私もグッと来たわあ。……そういえば最近食べてないなあ、ヘリパイル」

「ヘリパイルでどんなやつなんです？ 実は僕知らないんですよ」

「北のほうにヘリパ湖って湖があってね。そこにいる……、ニョロニョロした可愛い魚？ みたいなものことよ。捌くのが難しいんだけど、油がのっけていて美味しいんだよー？」

「なるほど、それは一度食べてみたいですね。ヘリパ湖って遠いんですか？」

「エリシエからだ馬車で2日くらいかかるかしらね。湖畔に街があって、かわいい宿が多いし本当にきれいで良いところよ」

異世界の観光地みたいなものかなあ。若いカップル御用達の場所、ヘリパイルを食べるとスタミナがアレして、夜はナニがヘリパイルってわけか。なかなか下品でよろしいな。「そう……。そのまま飲み込んで。僕のヘリパイル……」とか俺も言ってみたいものだな。

俺もエルフ少女との新婚旅行はそこに行くかな。ご主人様のヘリパイルが暴れて、私のビクに（以下略

「……今度行こうかー、ジロー」

「……え？ ああ、そうですね。みんなで行ったら楽しそうですね」

そうね、と軽く答えて妖しく笑うレベッカさん。

少しお金貯めて旅行を2人にプレゼントするのもいいかもしれないな。

今回レベッカさんには特にいろいろ手伝ってもらったので、自分の料金を払うと申し出たのだが、予想通りというかやっぱりというか断られた。

でも、そういうわけにはいかない。どうしてそんなに良くしてくれるのか、と聞いた俺にレベッカさんは言ったものだ。

「バラカのお導きが元になって知り合った人間同士はね、『大精霊の巡り合わせ』で、一生の友達になれると言われているのよ。だから、私たちはもう友達よ。友達のためにできることをしているだけなの。ね」

なるほど。友達かあ、と素直に嬉しかったけれど、でもお礼はしなきゃならんってことで……、ちゃんと用意してみた。

「レベッカさん。今回、たくさん手伝ってくれたお礼、いらないって言ってましたけれど僕の気が済みませんので、これ受け取ってください」

レベッカさんへのプレゼントは、大粒なガーネットを使った指輪だ。綺麗な赤い髪をしたレベッカさんには赤い宝石が良かろうと、手持ちから見繕ったものだ。

これも土台の製作はビル氏に依頼した。ペリドットをタダにするから、これもタダで作って！ と強引に頼み込んだものだ。

リング部はシルバー。留め金は金で、貝が宝石を挟んでいるような彫金を施してある。なんとなくアールヌーボー調でかっこいい。地味顔の日本人には、派手派手しすぎて似合わないだろうけれど、レベッカさんにはよく似合うだろう。

エンチャントは当然していない。というかミルクパールさんに贈ったペリドットは、いちおう精霊石ということになっているので、俺の精霊石（水晶）を使って神官ちゃんにエンチャントしてもらったのだ。このガーネットもエンチャントしたかったが、さすがにそこまで精霊石の大盤振る舞いはできなかったのだ。もう2個しか持っていないしな。

指輪ケースは当然というか、これも日本で買ってきたものだ。1000円も出せば上等なものが手に入る。最近じゃ1000円ショップでも売ってるけど、贈り物なのにそれでは流石にアレだからな。

ここでも受け取りを固辞するのかな、と思ったけれど、大人しく受け取るレベッカさん。俺が指輪のどうでもいいうんちくをペラペラ喋るものなにも言わずに聞いている。

ん？ どうしたのかな。あんまり好みじゃなかったらろか。

「えっと……。あんまり好みじゃありませんでした？」

「あー、ううん。違う、違うのよー。あはは、ありがと」

「いや、気に入っていただけたなら良いんですが。サイズがちゃん

と合うかわからないんで、嵌めてみてください。おそらく中指で丁度いいと思います」

サイズは事前に測れなかったんで、目分量とビル氏の眼力（あのときいっしょにいた女性の指のサイズで作れと無茶振りした）頼りだわ。

「じゃあー、はい」

と言って俺に指輪を渡し、左手を突き出してくるレベッカさん。

ん？ どういうことです？

ってか、はめろってことか。レベッカさんもだいぶ酔ってるなあ。こういうのって問題にならないのかな。こんな公衆の面前で……。まあいいか、シェローさんはなんか向こうの方で踊り始めちゃってるし。酒の席でのことなんて無礼講だよ！

「では失礼して」

と、中指に指輪をはめようとして……。いかん、酒でむくんどる！ 入らん！

仕方がないので、薬指にはめた。

左手の薬指に指輪をはめるとアレっていう風習もこっちにはない

だろうし、まあ別に関係ないだろう。

「ありがとっ！ 大事にするね！」

指輪を抱いて笑顔で言うレベッカさん。普段は姉御肌な感じだけど、酔うとちょっと幼くなるというか、かわいい感じになるというか……。

ほ、惚れてまうやろ……。



きっかり2時間ほどでエフタ氏は戻ってきた。

さていよいよ出陣だよ。ドキがムネムネするね。ちょっと先にオシッコしてくるわ。

「ジローさん、お待たせしました。引渡しは調印や契約がありますから、商館をお借りしていますので同行願えますか」

「あ、はい。よろしくおねがいます。こちらも1人連れがいますけど、いっしょにいいでしょうか」

「はい。かまいませんよ」

というわけで、付いてくと主張するレベッカさんといっしょに、こないだはビビッて入れなかった奴隷商館へ。

商談のための部屋だろうか、個室で少し待っていてくれとのこと、レベッカさんと2人で待つことに。

……やばい。楽しみなような不安なような単に飲みすぎてるだけのような、そんなもんがない交ぜになって軽く吐きそう……。

実はまだちゃんと奴隷というものに対して、向き合えていないというか、いまいち現実味を持って理解できていないというか……。これから理解していけばいいのかもしれないけども、もうここまで来たからには、進むしかないんだよな。進め俺！ 進め！

「進め！ 俺！」

「ど……、どうしたのよ急に、ジロー」

「あ、いえ、自分に発破かけてました。奴隷を自分のものにするということに実はまだビビッてまして」

「大丈夫よ。奴隷って言ったって終身雇用の契約するようなもんなんだから。あ、性奴隷は別よー？」

「……………」

「え、なに急に黙っちゃって……。まさか……。そういうことなの？」

「いえ、はっきりとはそう明言してませんでしたね、そういえば」

なんとなく流れる沈黙の時間。

いいじゃん！ 別に！ 男だったら誰だって憧れるじゃん！ 奇麗事なんて言わないよ俺は！ 性奴隷欲しいです！

「性奴隷ではありませんよ、ジローさん」

扉の隙間からエフタ氏。2重の意味でビビらせないで欲しい。ん？ 性奴隷じゃないだって？

うん……。まあそうね。

わかってた！ わかってたよ！ そんな美味い話はないってわかってた！

「今回は特にそういう約束でもありませんでしたしね。騙していたわけではないのですが、ジローさんもエルフの少女であれば良いという風でしたので、私もあえて言わなかったのは否定しませんが」

「いえ、もちろん問題ありません。全く問題ありませんよ」

やべ、語尾が変になっちゃった。どどど動揺なんてしてへんわ！

「では……、こちらも用意できましたので、今から連れてきます」

「あ、はい。おねがいします」

性奴隷の件はともあれ、ついにエルフ少女ちゃんとご対面だ。

緊張しすぎて本気で吐きそう。心臓とか毎分120回は打ってるよねーってくらいの早打ちぶり。そのくせだんだん酔いが醒めてくる始末。

でも飲んできておいてよかった！ シラフだったら気絶してたかもな。

まずエフタ氏、次にエルフ男が部屋に入ってくる。

「こちらです、どうぞ」とエフタ氏が呼び、部屋に悠然と入ってくるエルフ少女。

髪は美しく滑らかなベルベットのように美しく印象的な白金で、
腰まで伸ばして先っぽで一つ括りにしている。

肉感的ではないが、均整の取れたスタイル。身長は俺より低そうだ。神官ちゃんと同じくらいだろうか。

小顔なエルフ男よりもさらにずっと小顔なのに、エルフ男より長く、すこし垂れた耳。

おそらくは精霊石製と思われるペンダントと、ブレスレット、ア
ンクレットを身に着けている。

衣装は、絹を主体としてレースをふんだんにあしらった純白のドレス。

そして、露出している肌全体に施された赤青白緑の幾何学模様の刺青。おそらくは全身に施されているんだろう。……顔までバツチリ入ってるから、顔が可愛いとかどうのってのを完全に超越している。刺青のインパクトが強すぎて、軽く脳停止状態に陥ってしまう。

俺があっけに取られていると、レベッカさんが俺にそつと耳打ちしてきた。

「ジロー……。もともとキナ臭い話だとは思っていたけれど……。白い髪のエルフ……。あの子……。ハリエルフだよ。……。エルフの王族」

第18話

ヘリパイルはうなぎの香り（後書き）

まさかのレベツカさん回

第19話 ハイエルフは身最屑の香り

ハイエルフとか言われても……

ハイエルフってこんな刺青いれずみとか入れちゃう種族なのか……。クソッ、神官ちゃんみたいな感じを連想していたけど、ちよつとだいたい様子が違ってきちゃったじゃないのよ……。

でも刺青女ってこっちの世界ではアリなのかな。日本じゃ刺青そのものがリアルで見える機会ほとんどないから、インパクト超強いんスわぁ。この子が俺の奴隷になるのかぁ……。なんだろうこの気持ち……。

しかも王族とか……。

俺の前にクソ真面目な顔で座る3人。エフタ氏、エルフ男、刺青ハイエルフ娘。

……おい、どうして誰もなにも喋らないんだ！ 刺青ハイエルフ娘がじいっと俺のこと見てていたたまれないんだよ！

「ゴホン。なにも言わないんですね、ジローさん」

とエフタ氏。それはこっちのセリフでしょうよ。どうしろってんだ。

「……では、順を追って説明しましょうか。こちらはディアナさん。実はディアナさんは普通のエルフではなく、ハイエルフ族という……、簡単に言えばエルフの王族のようなものでしてね。ハイエルフ族はあまり下界に下りてきませんし、実質的な権力を持ってるわけでもありませんから、あまり知られてはいませんが」

なるほど……。あまり知られていないハイエルフ族を知ってたレベッカさんパねえ。

しかしガチで王族なのか。どうして王族が奴隷になんて……。

普通の奴隷でよかったんだけどなあ……。っていうより普通の奴隷のほうがよかったんだけども……。

「疑惑に満ちた顔をしていますねジローさん。気持ちわかりますが、聞いてください。…………ジローさんは運命というものを信じますか？」

突然なにを言い出したんだ、この男は。

俺が答えに窮していると肯定と受け取ったのか、あまり気にせず話を続けるエフタ氏。

「ハイエルフ族は『運命を司る大精霊ル・バラカ』に最も愛された種族だと言われています。そして、彼らは人生に一度だけ『特別なお導き』を授かるんですが、これが本当に特別でしてね。……関係する人間を巻き込んで、強制的にお導きが達成されるように動かさ

れるんですよ。本人も気が付かないうちに。綺麗な言い方をすれば、運命に導かれるといったところなのでしょうが」

導かれし者たちですね、わかります。

さしずめ俺は商人だからト○ネコポジションかぁ。ハズレだわぁ。

「……………ところで、ジローさん、どうしてこの怪しい勝負受ける気になったんでしたっけ？」

「それは……………なぜだか負ける気がしなかった……。って、つまり？」

「私としても確信はありませんでしたし、今でも実は確信があるわけでもないのですが、あの時点ですでにジローさんが巻き込まれていた可能性が高いかな、と」

「えっと、つまり、その特別なお導きにですか？ そのお導きの内容はなんなんですか？ 巻き込まれたのなら帰着するところがあるんでしょう？」

「おみちびきの内容はだれにも教えてはならない決まりなのです」

突然口を開くハイエルフ娘。あらかわいいお声。

「そう。ディアナさんの言う通り、この特別なお導きの内容は他者に知られてはならない決まりらしいのです。ですが、推察はできます。一つ前の行程はおそらく『奴隷になる』か、これに近い内容だ

ったのでしょうか」

「ひみつです」

そうか。ひみつなら仕方がないな。

「次の行程はわかりませんが、順当に考えれば当然『奴隷になって仕える相手を見つける』かそれに近いものでしょう。そして、そんな時にジローさんと出会った……。それこそ運命的に。私があの勝負を持ちかけたのは、そういった経緯があったからだったのです」

「僕が、その……ディアナさんの仕える相手の候補だと考えて勝負を持ちかけた？　では別に勝負をする必要はなかったのでは？」

「先ほども言ったとおり、確信があったわけではありませんし、私も商人の端くれですから……。なるべく得になるように動いたというだけのことです」

「……………」

「勝負の件ですが……、ジローさんが巻き込まれていたなら、必ずこの席に座ることになると、あの時点ですでに決まっていたのです。運命が必ずそうなるように導かれる。それがハイエルフのお導きの強制力でしてね」

「んん？　もう少し碎いて話してもらえますか？　いまいち要領を得なくて……」

「そうですね……。つまり、巻き込まれていたのなら、ジローさん

が市長になにを贈ったとしても市長は喜んで受け取っていたということですよ」

俺の15日間の努力が全否定！
いくら使ったと思ってるんだお！

「ですから、巻き込まれていても巻き込まれていなくても損のない勝負を打ったというわけです。……まあ、まさかあそこまで手の込んだ贈り物をするとは、私も思っていなかったので驚きました。そして、あれなら巻き込まれていなくても勝負に勝っていた可能性が出てくるでしょう。私が未だに確信を持ってないのはそういうわけなのです」

「勝っても負けてもエフタさんにとっては得をする勝負だったというわけですか。市長とどんな取引があったのかは、是非教えていただきたいところですが。……しかし、この……ディアナさんを僕に渡すのは損ではないのですか？」

「……いえ、それこそが最大の得です」

あ、そうなの？ すこしは損しろよ。

「実は、ソロ家は代々この『特別なお導き』をサポートする代わりに、ハイエルフ族からある協力を得る協定を結んでいましたね。行程もだいぶ進みましたし、もうすぐお導きは達成でしょう。そうなれば、私としてもソロ家としても大きな恩恵が得られるのです」

なるほどねえ……。もういっそ関心するよ。勝手に遊び人認定してたけど、案外やり手じゃないか。

今回の勝負のエフタ氏の書いた絵は……、俺が導かれてなくて負ければ精霊石10個儲け。導かれてなくて勝っても市長との取引分儲け。導かれていければ絶対勝って市長との取引分儲かって、さらにハイエルフのお導きも進んで儲かる。

精霊契約の時にエルフ男が言っていた通り、どう転んでも損にはならなかったってわけだ。

……まあ、俺にとってもいちおう損はないし、別にいいんだけどさ。ちよつと上手く転がされた感があるな。

でも……、奴隷になるなんてお導きありえるんだろうか。大精霊酷すぎだろ。

「……しかし、ディアナさんは奴隷、なのでしょう？ 別に僕でなくとも売ってしまっても構わなかったのでは？ 売れてしまえば、それがその運命だったということになるんでしょうし？」

「最初に会ったときにご説明しましたが、いわゆるエルフ奴隷を求めている方とは条件が折り合いませんでね。……いくつか事情はあるんですが、最大のものやはり、『ハイエルフになにか変なことをすれば種族間問題に発展する』という点でしょうか。これについてはジローさんも気をつけてください」

「変なこと……とは？」

「自前の奴隷となれば、性奴隷であろうとなかろうと、……
とがあるのが普通です。それで奴隷側が主人を訴えたりということも皆無と言ってもいいでしょう。……ですが、今回の場合はそうい

う風にはならない。ということですよ」

「な、なるほどなー……」

美味い話には裏があるとは言うけれど、裏ありすぎだよ！ ほとんど全部裏だった！

「……では他の事情のほうはなにがあるのでしょう？」

「これは本人を前にして言いにくいことですが……。まず容姿といえますか、全身の紋様に拒否感を示す方が多いだろうということ。『特別なお導き』中は精霊魔法が限定的にしか使えないという点。さらには、彼女は王族。つまり使用人がするような仕事は一切やったことがないという点も重要です」

Oh……………。

異世界で足手まといのお姫様を奴隷に……とか、それなんてエロゲ？ って雰囲気なのに、実際は手を出せば種族間問題、見た目もヘヴィな刺青娘、精霊魔法もちよいちよいで、料理もできなきゃ掃除もできん！

「エフタは無礼です」とか言ってて可愛い感じもするけど、刺青とのギャップがすげえしなああ。

しかし……、俺って異世界貿易のために文章が読める護衛が欲しいってだけじゃなかったっけか？ いつのまにかむしろ俺が護衛しなきゃならない感じになっちゃったんだこれ。ぐぬぬ。

俺がそのときどんな表情をしていたのかはわからないが、エフタ

氏と話している最中も、じいっと俺を見つめていたディアナが言った。

「だいじょうぶだよ、ご主人さま。お導きがおわれれば、みんな良くなります。だからよろしくおねがいますね」

（綾馳次郎脳内裁判）

「えー、突然ではありますが、第754回脳内裁判を行いたいと思います。今回の案件は『どーよ今回のコレ。許せる？　つかマジどうすんの？　脱出しちゃう？』です」

「^{有罪}ギルティ。エフタの野郎、マジ外道。日本円に換算して70万くらい使ったのに！」

「^{有罪}ギルティ。俺のエルフ少女とラブラブHの夢が失われて何に希望を抱いてこれから生きていったらいいのもうわからない。俺は今泣いているんだ！」

「^{有罪}ギルティ。もっとライト感覚で奴隷を所有したかったのに、人生で一回だけのかいクエストとかちよっと重いんすよねえ」

「^{有罪}ギルティ。もっとオッパイ大きい子が良かった」

「いや待てお前たち。気持ちはいよくわかる。が、彼女は今なんて言った？　ごしゅじんさまと言わなかったか。そうだ、俺は俺たちはもう彼女のご主人様なのだ！　もうそれだけで許せる！　^{無罪}ロットギルティ！」

「判決。あの子をご主人様と言ったからすべて許せる気がした、この異世界の片隅で」

（脳内裁判終了）

「……………エフタさん。こんなにネガティブな情報を晒してしまったら、僕が彼女を奴隷とすることをやめると言い出すとは思わなかったんですか？」

もうやめる気はないんだけどな。

あれ？ それともこの気持ちがお導きの強制力で発生したものなのかな？

「いえ、思いません。これは口止めされているので言えませんが、もうあなたはどうかってもこの契約を思いとどまることができない。……そうでなくとも精霊契約もしていますしね。『あなたが勝った場合私からエルフ少女を受け取る』と。それに最初に言ってたじゃないですか。エルフを手に入れるのが夢だって」

「ん？ それって受け取らなかった場合、契約違反になるんですか？ ちょっと曖昧ですね」

「そうですね。曖昧です。……案外契約違反にならないかもしれないかもしれませんし、試してみますか？」

「……………あー、遠慮しておきます」

悪いわー。エフタ氏性格悪いわー。



その後、俺とハイエルフ娘のディアナとの精霊契約をし、受領証にサインをして、つつがなく契約が完了した。

天職板を出して内容を確認してみる。

【精霊契約】

ジロー・アヤセとディアナ・ルナアーベラとの奴隷契約要綱
ディアナはジローの所有する奴隷としてほどほどに働いてもよい。
ジローはディアナを所有する者としての責任として、ディアナが
過不足無く生活できるよう勤めなければならない。

この契約の破棄は両者の同意の下、いつでも行えるものとする。
この契約が果たされなかった場合、果たさなかったジローの祝福
が失われる。

……ん？

あれ？　なんか偏ってね？　なんか俺不利じゃね？

さっき話し合って決めた契約内容と大幅に違うんですけど！？

「……ああ、ジローさん、言い忘れてました。ハイエルフとの精霊契約は、精霊が勝手に大幅な脚色をすることがあるそうですから、気をつけてくださいね。ふふふ」

見ろ！　このエフタの嬉しそうなツラ！　脚色ってレベルじゃねえぞ！

「ああ……、これで私はもう奴隷……。ご主人さまに首輪をつけられて街を歩かされたりするので……。そして見世物小屋に入れたりするんだわ……。ああ……。ご主人さまあ無礼ですう……」

こっちはこっちで変な妄想が口から溢れてるよ！！　ちゃんとお口チャックして！！

第19話 ハイエルフは身最屑の香り（後書き）

こちらへんの話はどんどん進めちゃいたいで
次回更新は今夜中にする予定です
ご意見ご感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102y/>

ネットオク男の楽しい異世界貿易紀行

2011年12月13日12時01分発行